

幼児の教育

家庭・保育所・幼稚園

1993 2

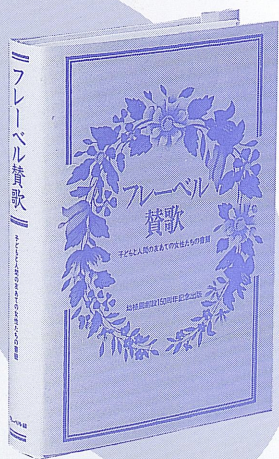


第92巻 第2号 日本幼稚園協会

フレーベル先生・幼稚園創設150周年記念出版

フレーベル賛歌

—子どもと人間の友あての女性たちの書簡—



旧ドイツ民主共和国アカデミー文庫と、パート・ブランケンブルクのF・フレーベル博物館に、フレーベルにあてた教え子たち約200人の1,000通を越える書簡が収蔵されています。一部公刊されていますが、それらを除いた約140通の書簡がドイツ幼稚園創設150周年を記念して1990年に出版されました。本書はその完訳本です。

書簡はドイツ教育委員会と大学教育学部の委嘱をうけたH・ケーニツヒ教授の手によって精選され、年代順に配列されています。「さあ、私たちの子どもたちに生きよう！」という先生の呼びかけの言葉と、その根源にあたるキンダーガルテンの思想と、当時の社会や経済の困難さや人々の無理解とたたかう優れた魂に触れることができます。フレーベルを敬慕しキンダーガルテンの運動に身を挺した女性たちの知性と情熱を具体的によみがえらせます。

● 推薦します。

広島大学名誉教授/日本ベスタロッチ・フレーベル学会会長

莊司雅子

全国国公立幼稚園長会会長

江橋照雄

日本保育学会会長

岡田正章

全日本私立幼稚園連合会会長

小林龍雄

全国保育協議会会長

水岡 薫

特 色

- 幼稚園草創期のフレーベル先生の教え子たちの手紙を年代順に紹介し、その揺籃期に生きた人々の苦難と歓喜にいろどられた歴史的証言を集めました。
- 師・フレーベルに寄せられた教え子たちの数々の手紙は、幼児教育の父フレーベル先生の魅力ある人間像と教育思想のエスプリを余すところなく浮き彫りにします。
- “キンダーガルテン”運動に身を挺した女性たちの英知と情熱にあふれる生き方、考え方は示唆に富み、幼児教育・保育に携わる人々の使命感を喚起します。
- 幼稚園の園長や保育者の立場からの保育内容や方法に関する相談や報告が多く、保育現場の得難い保育実践上の参考資料です。
- 女性たちがいち早く獲得した職業的地位である幼稚園教員、保育者たちの苦難の歩みが生々しく表白されており、女性職業史、婦人解放運動史の貴重な資料です。

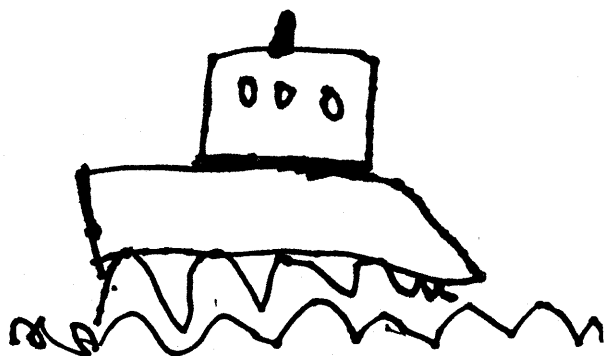
岩崎 次男 他16名・訳

A5判・420頁・写真資料32葉・定価4,000円(税込)

<わくははフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社総括部(03)3292-7783(代)にお問い合わせください。

キンダーブックの
フレーベル館

幼 児 の 教 育



第92卷 第2号

幼 児 の 教 育 目 次

— 第九十二卷 第二号 —

© 1993
日本幼稚園協会

△巻頭言▽「ピッチ」または「保育臨床」のこと……………間藤 侑 (4)

統合保育……………津守 真 (6)

第45回日本保育学会講演

高齢化社会と子ども……………原 ひろ子 (11)

シチューと大根……………小口 眞美 (19)

あっち向いて…ホイ!……………田島 敏道 (24)

二歳児保育の部屋から……………守永 英子 (28)



チエルノブイリに健やかな日々を

倉敷でのジェーニャ、ユーリヤ、オクサナ……………室賀 昭子…(32)

子どもたちへのまなざし(2) 思い出の紙芝居……………松井 とし…(42)

都市に浮かぶ幼稚園(3) 他園との交流を通して……………足立なぎさ…(44)

ある日の育児日記から(26)……………佐藤 和代…(53)

ランチルームとバストップ

アメリカの子どもの本音の世界……………入江 礼子…(54)

表紙・紺野 千秋／扉題字・堀合 文子

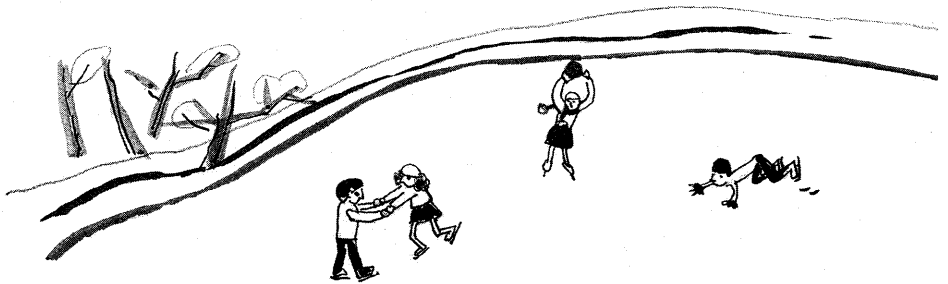
扉カット・お茶の水女子大学附属幼稚園園児

カット・福田 理恵

編集委員・本田 和子／田中三保子

吉岡 晶子・岩上 節子

編集部・大沢 啓子



「ピッチ」または「保育臨床」のこと

間藤 侑

我が家には、ピッチという名の白いカナリヤがいます。今は飛ぶことができません。つい先日、私たちのちょっとした油断から、彼は仲良しの妻の命と自らの左の羽を、近所のネコに奪い取られてしまったのです。

病院から帰ってきたピッチは、あのきれいな澄んださえずりを全く忘れていました。

児童文学の名作、ポール・ギャリコの「まぼろしのトマシーナ」やジョン・マーズデンの「話すことがたぐさんあるの……」を思い出します。最も大切だったもの（父への愛とネコ）を同時に失い、あるいは自分の愛する者同士（両親）の激しい憎しみ合いに巻き込まれ、共に言葉を失った少女たちの物語。

人であろうと小鳥であろうと、一瞬の暴力の風に、

なすすべもなく幸せをふみにじられたものの悲しみや苦しみと、やり場の無い怒りを思い、心が痛みます。

実はピッチたちは、明日にも大学の附属幼稚園へあげる約束でした。もうそれはできなくなりました。でも、羽が片方無いという理由ではありません。私たちの中に大きな気持ちの変化があったからなのです。

何日か前までの彼らは、二年あまり可愛がってはいなくても、ペットでしかありませんでした。だから、幼稚園のインコと交換することに特別な思い入れはありませんでした。でも今は、間違いなく大切な家族の一員だとみんな感じています。小鳥一羽の命が、こんなにも重いものだと正直予期しませんでした。

一時の感傷的な感情移入さと言われれば、そういう部分もあるかもしれません。でも、朝、籠のカバーを

取る時、帰宅して「元気がピッチ」と声をかける時、与えられた命を懸命に生きようとしている姿に、家族一人ひとりが、それぞれにとってのピッチの存在の意味を、心に沈めているように思うのです。

私たちの生きる世界は、普遍的客観的な因果関係と、個人的主観的な意味関係で作りに上げられていると言えますが、生きることの喜びや悲しみ、苦しみや怒り、また祈りや願いは、主に意味の世界につながっています。

因果関係でものを見る時、相手は利用価値だけでしょうか評価されません。相手が人間でも自然でも同じことです。しかし意味関係は、互いに影響し合う関係なのです。

これは「臨床の知」の感覚に通じます。先の保育学会のシンポジウムで、「保育臨床」という考え方が、学会には珍しいほどの熱っぽさで論じられました。

(この内容は、本誌の平成四年十月号で、シンポジウムの司会をされた大場幸夫氏が報告しています)しか

も、午前の大江健三郎氏の講演でも、「臨床の知」をキーワードとする時、文学と教育が本質的なところで出会うという一つの思想が語られ、深い感銘を受けました。

それは決して難しい思想ではありません。カウンセリングなどの心理臨床の場ではごく基本的な姿勢ですし、気付いていなくても幼児教育現場でも親しい感覚なのですから。

なぜなら、幼稚園の先生たちは、いつも子どもと同じ視線で接し合い、子どもの見つめる方を一緒に見ていこうとします。子どもを対象化し、客観的に観察し知的に理解しようとするよりは、子どもの心に寄り添い、共感しようとしています。それが保育臨床の心です。

それこそは、今私たちの文明が一番必要としている「感覚」ではないでしょうか。そのことに気づき、幼児教育の思想の重さを確かめる時、が来ているような気がします。

(新潟大学・附属幼稚園園長)

統合保育

津守 真

四歳のTくんは、幼稚園にゆきながら私の養護学校の幼稚部に通っている。

私共のところにくる日は、朝、遅目になると、まずロッカーの中ですっぽり入る。まず自分の空間を確保するところから一日を始めようとしているように思える。母に帰れと、バイと手を振り、母が立ち去るとすぐにロッカーから出てくる。そして弁当の袋を持ち、食卓机にくる。私がおぼんを出す。Tくんは自分で袋を開き、弁当箱を出し、自分で前かけをかけ、弁当箱の蓋をあけてしばらく眺める。多くの場合、弁当は食べない。ママと言うので、私はママがお弁当作ったんだねと言うと、また蓋をしめてロッカーに置きにゆく。母親が作った弁当は、家庭と園とのつなぎ目であり、子どもの心を外に向けさせる前

の心の拠りどころである。

それからTくんは私の手をひいて二階の階段を上り、途中の段に腰かけて下を見下ろす。この階段は先年赤い絨緞を敷きつめた。何人もの子どもがこの階段を好きで、途中で立止まったり腰をおろしたりする。下の空間と上の空間をつなぐ中間にある階段は、子ども好きな場所のひとつである。Tくんは何回か上ったり下りたりした後、二階の隅の静かな部屋で私とふざけて笑い合って遊ぶ。ほぼ一時間位こうしてゆっくりと過ごす、私をおいて部屋から出てゆく。それから後がこの子の世界である。

私は立ち去る子どものあとを追わないことにしているのだが、先日は足どりも達者ではないこの子の姿が一瞬の間に見えなくなり、私は学校中を探し回ったことがあった。そのときは庭にひとり出て、木の櫓の上で他の大人と遊んでいた。胸を張ってひとりで歩くこの子の姿は、小さいながら堂々として頼もしい。

Tくんの好きな遊びのひとつが、箱積み木を積むことである。大きな箱積み木ひとつずつ抱えて床の上に置く。三個位重ねると次の山をつくる。自分で力を出して運ぶことに成就感を感じているらしい。後半になると力も尽きてくるようなので、私が一箇所ずつ渡す。こうして全部の積み木を並べると、それなりにこの子の作り出している秩序が見えて面白い。三、四個ずつ重ねられた積み木の山は折れ曲がっていくつかの半分囲まれた空間ができていく。殆ど無意識に作られた形であるが、Tくんはその積み木の後ろから顔を出し

て、通りかかる人と笑い合って遊ぶ。とり立てて言うほどのこともないように見える積み木遊びであるが、毎回、三十分位はせつせとこうして遊ぶ。ひとしきり遊ぶと、日によって、大便が一杯出る。ひと仕事やり終えたという感覚があるのだろう。

ある日、迎えに来た母親は、この子の遊んだあとを見て次のようなことを言った。Tくんは幼稚園では積み木をやり始めると、すぐに他の子がやってあげると言って手を出すので、この子は最後までやれない。家では二歳下の妹がきて途中でこわしてしまふ。この子は自分が思うように積み木をやれる場がないのですと言う。私は、とりたてて言う程のことでもない小さな遊びのひとつまなのだが、その子なりのペースで動く場を確保することが、かならずしも容易ではないこと、そしてこの小さな保育の場こそがどの子どもも欲していることを思った。

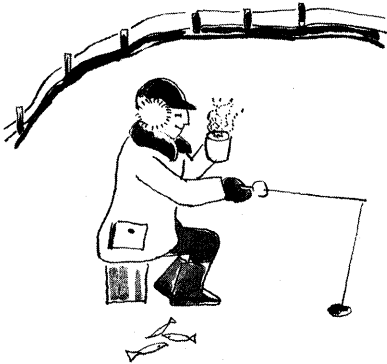
Tくんは、朝、服を着がえるのに時間がかかる。自分の好みの下着や洋服を選び、あるきまった手順で自分で着ないと気が済まない。その手順がうまくいかないと大泣きする。幼稚園は九時までに登園することになっているので、母親はTくんのゆっくりしたペースに付き合っていると時間に間に合わない。子どものことがよく分かっているこの母親にとっては、朝は葛藤の時間であるという。私も、幼稚園はどうして朝の登園時間をそんなにきつくきめなければいけないのかと疑問に思う。家庭と幼稚園とはもつと滑らかに移行

する方法を工夫する必要がある。子どもにとり、自分が納得して生活を進めることが、生活全体を安定させ、またそれから先に進む子どもの意欲をつくる。ことに障害をもつ子どもは、夜の眠りの浅い日もあるし、身体条件の良くない日も多いだろう。園の側で、朝の時間を子どもに合わせてゆとりをつくることによって親子ともに生活しやすくなると思う。

Tくんは一日の前半を大人とゆっくりと過ごす、そのあとは自分で活動するのだが、日によっては、この子が一日大人の傍から離れないことがある。それは幼稚園の運動会や遊戯会の時期である。比較的ゆるやかな日課のTくんの幼稚園でも、行事のころは子どもたちが自分のペースで生活できないようである。先生も皆を一緒に行事に参加させることに気を奪われて、子どもの生活の他の面が見えなくなるらしい。行事への参加の仕方は園によっていろいろだから一概には言えないが、秋の運動会とクリスマスの遊戯会の頃には、障害をもつ子どもには緊張がつづく日が多い。とくに練習のときが問題である。本番の日はむしろ祝祭の賑わいがあって、どの子どもたのしめる。このことは障害の子どもに極端にあらわれるが、どの子どもにもある程度共通のことである。私のところに来ていろいろの子どもたちを見ていて、考えさせられることのひとつである。

とくに統合保育で根本のことは、どの子どももあるがままでよいと思つてつき合うことである。もっとまじな人間になつてほしいという期待が大人の心に少しでもあると、子どもはそれを肌で分かつてしまう。そのまま立派に園の一員だと周囲の人も自分も思えるところから統合保育ははじまるのだと思う。

(愛育養護学校)



第45回日本保育学会 講演

高齢化社会と子ども

原 ひろ子

高齢化社会とは、ご承知のように、人口のピラミッドがピラミッドでなくなつて、だんだん釣鐘状に、さらにはマッシュルーム型と申しましょうか、下のほうが少なくなつていく社会のことです。近年出生率が減少していることについては、特に人材供給という視点から「女たちよ、産みなさい」という論調が随分できて、新聞やTVの番組等でご承知のことと思います。また、幼稚園の先生や保母さんの定員が各自自治体でどうなるか、この

学会にご参加の皆様にとつても生活の問題に関わるようなことも、しばしば話題になってきています。そういう意味では、高齢化社会は、大人の側からみて不都合なことが多くように思われます。しかし、これを子ども側の側からみたときにどういうことになるだろうか、ということについて今日はお話ししてみたいと思います。

ひとつは国家予算の在り方なんですけれど、私には、国の予算をはじめ、地方自治体の予算や民間のお金など

が、子どもに向かってどういうふうに割り当てられているのか、三歳児以下、就学前、小学生、中学生、十八歳未満とどんなふうにお金が出ていっているのか、考えてみる必要があるなと思っています。

しかし、残念ながら計算する技術をもっていません。

現在女性の問題にどういう計算が成り立つかにつきましては、「社会政策におけるジェンダーバイヤス」、即ち男にとつての社会政策と女にとつての社会政策がどういふふうにちがうのか、試算中の方がいらっちゃって、大変複雑で時間がかかるものだと思います。子どもにつきましても申し上げるまでもなく、文部省でとりまます文教予算や自治体に私たちが納める税金、民間の財団や私立の幼稚園の経費など、どれくらいのお金が必要かのために動いているのか、こういうのを合わせないと、厚生省が保育所にいくらかお金を出しているのか知るだけではダメだと思ふんです。その辺のところを計算するには、私だけの力ではちょっとできないので、どなたか専門の方、すでに計算していらっしゃる方がいらしゃいましたら、

ぜひ教えてください。

私どもの国は法治国家であつて、どうしても法律の体系のなかでいろいろ動いておりますし、それプラス財政が単年度決済の形で運営されております以上、どういふことが行われているのか、保育に関わる人は少しドライなことになつてくる必要があるなという気がいたします。

先程の「ジェンダー・バイヤス」についてなんですけど、例えば、日本では福祉をきめる法律や税制などを決める審議会のメンバーやもとの法律をつくる官僚の方々は、ほとんど男性で、たまに女性もいらっしゃる程度です。もっとも最近では国際婦人年などございまして、二十年前のなんと三倍、三%になるなど、めざましい変化を遂げていますが、それでも世界全体でみると何十何番目、OECD諸国では最低の女性参加率なんです。

また、教育の審議会に現場の体験のある方が選ばれる

こともございますが、任命された当初は画期的だとかなんとかいつて、新聞に写真付で紹介されたりしますが、審議会で実際に発言する機会にめぐまれないのが実情のようです。

このことは、大人と子どもになると、女と男よりももっと不利で、女は飾りでも審議会に出られますけど、子どもは飾りにもなっていない。そういうなかで、大人は子どもの都合というのを考えた在り方というのを、子どもになりかわって考えたつもりになっているということなんです。大人と子どものこうした関係を「何バイヤス」と呼べばいいでしょうか、保育の専門の先生でしたら、いい言葉を思い浮かべなさるのではないのでしょうか。

さて、高齢化社会における子どもの問題を考えると、都市中心部における子どもの過疎と農山漁村の子どもの過疎、このふたつが当面の課題に入ってくると思います。

そのときどういう工夫をするか。例えばお年寄りがお集まりになる場所と子ども達が集う場所を近くにしたり、一緒に建物にして、お年寄りから長年の知恵を受け取り、子ども達の元氣をお年寄りからあげるといった試みをしている自治体や町内会があることは、私が申し上げるまでもないことだと思います。

ただしこの場合も、うんと小さいお子さんならいいけれど、学童クラブなんかと一緒にするのは御免こうむりたいと言われたりする。高齢化社会になるにつれて、子どもイコール危険、うるさい、汚いといったような見方もでてくるわけです。保育園の先生方も近隣とのお付き合いにはご苦労なさっていることと思います。子どもが騒音公害のもととして見られると、子どもを持っていらっしゃる方は、「産めよ、育てよ」と言われながらも、一方で身近な体験のなかで近所にうんと気配りをしなければならぬ状況が、施設や親の立場からでてくるわけです。

これは、密集していない地域で生活していない方には

実感はおありにならないかもしれませんが、密集している地域でお暮らしの方にとっては、子どもは迷惑とみられ、家探しも楽じゃないんです。老人の転居の問題も、地価高騰のなかで深刻ですが、子どものことを考えると同時にお年寄りのことも考える、子どものことだけでなく老人や、それから保育学会の精神でいくと障害者の問題、つまり弱者とよばれる人達のこととあわせて考えることが大事だなあと 생각합니다。

高齢化社会と子どもを考えていくときに、非常に大切なのは、「母性」とか、大日向さんの言葉で言えば「育児性」の中身は何なのか（大日向雅美『母性の研究』川島書店 一九八八、『母性』新曜社 一九八八）、子どもが育つとき子どもを育てるとき、どういう条件がそろえば育つと思うのか、というコンセンサスを家庭なり、地域社会なり、幼稚園や保育園、医者と患者である私達の間で、どういうふうに作っていくかだと思います。価値の多様化と申しましようか、そのところが一人一人の心の中でもいろいろな問いが出てきて、それを今もみ

あっている段階らしい。なかでも、いわゆる子を産んだ母親だけにはなく、「母性」という概念を今日どう位置付けることができるか考えたいと思っています。大日向さんは、「母性」から「育児性」へと提唱していらっしゃると思いますが、それに対して私は、「次世代育成力」という概念から考えることにした理由をここで話したいと思います。（原ひろこ 館かおる編『母性から次世代育成力へ 生み育てる社会のために』新曜社 一九九二）

生物学という親、即ち精子と卵子の持ち主だった個人を親とするならば、高齢化社会では親だけが子どもを育てるといふ発想をちょっと切り替えて、産んだ人も産まない人も子どもを育てるといふ発想が大切なのではないでしょうか。生物としての母親であるか否かを離れて、「社会のなかで育つ子ども」をどう考えるか、ということなんです。「社会のなかで育つ子ども」というと、往々にして文部省の健全育成の発想でいくと、地域の子どもも会活動を盛んにして補助金を出しましようとなる。もちろん、そういう活動はないよりはあったほう

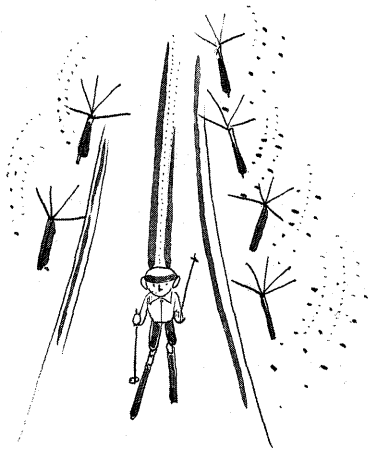
がいい、とても大切なことですが、そういう発想だけではダメなんです。もっと社会政策全体のなかで、都市計画ないしは地域の空間的デザインが、保育の立場からみてどうなのか。◎県◎郡◎町に育つ子どもからみて、子どもが走り回りやすい状況は何か、どのくらい足を鍛えるといいか考えていくことが、必要ではないでしょうか。

今日の保育学会のプログラムをみせていただいていると、保育者として私は何ができるか、保育者と親とのつながりはどうするか、親は子どもをどうみているのだろうか、といった発表はたくさんあったように思われます。と同時に、「家族・地域・親子」というセッションで地域をテーマにしたものが少なかったのは、興味深い分だけ深刻だなあと思いました。もちろん、地域に関する研究を進展させていくのは大変で、評論家のエッセイ程度ならすぐできるでしょうけれど……。

先程もいいましたけれど、特定の地域だけでなく、国家とか財政とかマクロなレベルでの子どもの位置付けに

対する研究がうかがえるとうれしいなあという気がします。

それと同時に、特定の幼稚園、保育所においてだけ



なく、もっと広げて今の社会のなかで子どもを育てていくことを考えるネットワークを保育関係者だけでなく、市会議員さんら行政サイドや商店街の人達、開業医のお医者さまなどをつくっていくことも大切ではないでしょうか。そういう形で、子どもが遊ぶ空間、移動する状況をどうやって具体的に充実していくか、こういう実践はすでになされているのかもしれませんが、大事なのではないのでしょうか。

私は近年、山形県の朝日連峰の方で調査をしているわけですが、そこでおもしろかったのは、「東京の人はよく歩きますね」と言われたんです。「ちょっとそこまで歩いていきます」と言うと、「いえいえ車でどうぞ」と勧められる。どうも東京よりも子どもがモーターゼーションに浸っていると申しましょうか、モーターゼーションにさらされている度合いが大きいために、子どもが歩かなくなっているようなんです。

例えば、過疎になってきて三十戸しかない集落がございます。その小学校は、全校生徒十七人しかないんだ

けれど、過疎になることの悲しみが託されているんでしょうか、地域をでていった人、住んでいる人からの寄付で立派な校舎が建っちゃったんです。全共闘世代の人達からは考えられないくらい、いい設備がそろっていて、まるで天国のような小学校なんです。が、そのたった一人の一年生が遊びに行こうと思ったら、友達を探さなくちゃいけない。いずれ中学で一緒になれるかどうかわからないにしても、遠い集落に住んでいる子ども達と友達になれるように、いくつかの集落が合同でサッカー大会や運動会、お祭りなどをして、一生懸命取り計らっているわけなんです。それでお友達はできるわけなんですけど、そうなると親心から、子ども同士で遊ぶ時間を作ただけ長くしてやろう、充実して遊べるようにと、車で送り迎えしてやるわけなんです。昔は自転車で通っていたそうですが、今では山道はビューッと凄いスピードで車が行き来して、かえって危ない。この種のことをどうするか、つまり大人のモーターゼーションに依存しない、子ども達が自由に動ける場所をどう作る

か、が問題なんです。

十年ほど前のOECDの会議で日本のスピーカーが、「原っぱの喪失」を唱えて外国の人たちに印象を与えたことがございました。けれども今や、「原っぱを取り戻す」というより「子ども道をどうやって取り戻す」キャンペーンをしなくちゃいけない。移動するのでも大人のモータリゼーションに依存するのではなく、また生活時間も大人に管理されるのではなく、子ども達のペースで行ったり来たりできる、つまり活動に関する管理されない状況をつくって置いて遠くから大人が見守る工夫ができないものでしょうか。

つまり、保育する場合に子どもとどう関わるか、親としてどうしつけるかについては考えられやすいですけれども、どういうふうにしないか、負の関わり、負の発想を高齢化社会の子どもを考えると、うんと意識しないといけないのではないのでしょうか。特に日本人は、やることにおいて意味があると思うようですので、することに於いて自己確認をし、自分のやっていること

を評価する。若い人のなかには体得していらっしやる方もいるようですが、しないことに意味を見いだして、それについて自己評価し、自己点検したりすることが、なかなか習慣になっていない。けれども、しないことのためにどういうお金を使うかなんて、子どもにとってすごく大切なことではないかと思えます。

例えば、自動車に乗せてあげないとすると、子ども道を作らなきゃいけない。随分お金がかかることで、これを自治体に納得してもらうためには、住民側がオーガナイズし、大変な時間をかけなきゃいけない。

こうした物理的なこと以外にも、高齢化社会になるほど世代間の考え方のちがいをどうやって折り合いをつけていくか。たくましい人はなんとかこなしていくでしょうが、そうでない人が抱えている悩み、自分の親と自分との子育ての考え方にズレを感じて、人間関係の調整を学習中の若い母親などへのサービスを行わなくてはならない。子どもを育てやすい社会状況を作るには、今の対処療法的政策を乗り越えて、私たち生活している側、現

場で関わっている側が、何らかの形で工夫を積み重ね、
試みをふやしていくことが大切だと思います。

高齢化社会であるからこそ、異世代でのコミュニケーションをどのくらい丁寧にやっていたりするか、考えていきたい。それと同時に、従来日本の活動が常識としてきた、「あの人は子どもがいらないから、ちょっとね」「離婚したらダメ人間」といった人間にたいするレッテルの張り方をやはり変えて、一緒に子どもものこと、それからお年寄りのことを考えていくべきなんです。例えば、自分は若くして両親を亡くして孤児として頑張ってきた、だから親のない子として差別して白い目で見えてきた人達、親の面倒をみるのは当たり前だ、親がずっといたから勉強もできて、大学まで行っちゃったりしたんだから、というような、あなたと私のちがいを越えて、みんなでお年寄りとお子どもの面倒をみていこう、助け合っていこう。

多様な育て方、人生の歩み方、老い方、死に方を、などと
言うのはやさしいけれど実際はね、とお思いでしょ

う。けれども、身近なところでの工夫が随分といろいろな
ところでされているようです。地域社会で工夫されている
情報を取り入れ、互いに交換したりするといいいのでは
ないでしょうか。私達のようにしゃかりきに働くよう育
てられた人間は、「しなくてもいい」知恵をもっている
若い人達から学ばせていただければと思います。

(お茶の水女子大学女性文化研究センター)

※ この原稿は、昨年五月、日本保育学会第45回大会の
講演録音をもとにまとめました。
(編集部)

シチューと大根



小口 眞美

私が子ども達とすごしている幼稚園は、小学校との併設です。子ども達は、お昼に、お弁当を持って来ますが、職員は小学校の給食をもらいます。給食には、子ども達がお弁当箱に詰めて来られないメニューもあります。先日、その一つのクリームシチューが出ました。トレイをテーブルに置くと「あっ、いいな」「いい、におい」と子ども達が首をのぼして来ます。その日は、たまたま出張や何かで食事をとらない先生が複数いたのでシチューはたっぷり余っていました。「お茶のかわりにシチュー飲む？」と尋ねると「うん、のむのむ」と力強く返事する子や、もう椅子を立ててコップのお茶を空けに行く子。

「おいしーい」「あったかい」「トウモロコシも入ってる」「ほんと?」と言いなながら嬉しそうに食べている子ども達をみて、私はちょっとした満足感を味わいながらゆったりと食事をしていました。と、E子が「ねえ小口先生の味がするシチューがあったらいいね。私、おかわりして食べちゃう」と言い出しました。この時、子ど

も達の関心の主役はシチューだったはずなのに急に自分にそれがまわって来て、それが突然だったこともありませんが、「私がシチュー？」という意外な内容にも驚いて、私はジャガイモが喉につまってしまったような気分になり物が言えません。

それまでシチューに顔をうつ向け口に運んでいた子ども達が、E子の話に顔をあげ、見合せながら「うん、うん」「おなべにいっぱい作ってね」などと柔軟に対応し語り合っている情景と私との間に透明な壁が出来てしまいました。三匹の子ぶたのオオカミのシチューが思い浮かびました。でも、子ども達がこんなにやわらかな表情で残酷なことを言うはずがないと思ひ直し、それでは、もしかすると「担任の干渉を断ち切りたい」という潜在意識の表れかもしれない、などと思ったりしました。けれども「食べる」というのは自分のからだの中にとりこむことです。「先生の味がするシチュー」という架空の食べ物の場合、心の中に取りこむということでしょう。それを「したい」と言うのですから「先生、好き」

というメッセージの手法と考えてもいいのではないかしら、というところに思い至り、やっとな壁が消えてくれました。それでも、その後、何か他のメッセージも入っていたのではないかと、気にかかっています。

K男は、今年の四月、五歳児になってからこの学級を担任した私にとって、とても気になる存在でした。自分に対して、強くあらねばならない、かっこよくあらねばならない、人にあなどられてはいけない、というような課題を課していて、実際に他の子はK男に一目置き、従うようなところがありました。幼稚園で他の子と同じ時間をすごしているのに何倍も気を使い、強そうにしているのに本当のところは疲れているようでもありました。このK男とどれだけ心を通わせられるか、というところに、私の存在の意義がかかっているように感じられました。その後、いろいろな経過があり、何か事が起こるとポキッと折れてしまいそうな硬さのあったK男は、柔軟な強さを持つようになりました。自分の心情を素直に出

し、友達的心情に添う心地よさがわかってきたのか、顔がくしゃくしゃになるような笑顔がみられるようになりました。

ある日、そのK男のお母さんに廊下で呼びとめられました。「先生、私もうショック。情けなくて。あの子、こんな絵しかかけないのかしら」廊下の掲示板にはその時、芋掘りの時に近くの畑で抜いてきた大根の絵が貼ってありました。

大根を抜いてきた次の日、保育室に幼稚園用に抜いて来た大根を寝かせて置いておきました。葉は畑に生えていた時に似せて広げてあります。渋味のある抹茶色の全紙を縦半分に切り、おおかたの子の登園が終わったところで、私はパステルで大根の絵を描き始めました。この時には、「できたら子ども達にも昨日の感激を思い起こしながらかいてほしい」という願いがありました。

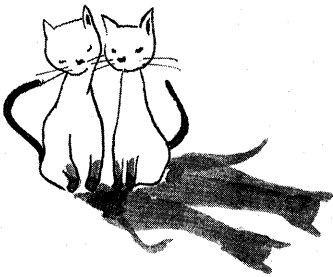
「なにしてんの？」

「大根、食べて無くなっちゃわないうちにかいておこう

と。思って。こーんなに大きいんだし、自分で抜いたの初めてだから、何だか嬉しくって」

「ふーん」

ところが、かいているうちに面白くなってきて、あま



り子ども達の様子も気にならなくなりました。

「だいこん、かいてるの?」

「そう」

「きのうのだいこん?」

「そう」

「うまいね」

「そうかな? うまくてもうまくなってもいいの。なん

だか、かいてたらどんどんかきたくなっちゃって」

「かみ、もっとある?」

「ある」

「どこ?」

「えーっと、あそこのテーブルの上よ」

「一まいもろうよ」

「どうぞ」

というような具合で、結局全員が大根の絵を描いたので
す。子ども達が描き始めると、私は描き続けることがで

きなくなりました。子ども達には、モデルの大根は必要
ないようでした。とげの痛さを、まだ指で覚えている子
は、黒のパステルで立派なとげを沢山描きます。抜いた
時の大きさを自分の背丈と比べて覚えている子は寝転ん
で大きさをはかり「先生、紙たりない。もう一枚もらう
よ」とテーブルで紙をつなげています。自分で抜いた途
中で曲がった大根を愛しむように思い出しながら描いて
いる子もいます。「葉っぱがさ、太陽のエネルギーを運
ぶんだよね」と言っている子の葉は立派です。自分なり
の表現をしながら、自分とは違う友達も心地よく受
けいれている雰囲気涙が出そうでした。素直で、のび
のびとして、自信に溢れている姿を前にして、指導上の
環境作りとはいえ、下心から始まった自分の絵が恥ずか
しくなりました。

実はこの日、K男は欠席でした。そして、次の日、出
席したK男は、テーブルの上に重ねてあった大根の絵を
登園早々みつけて「これどうしたの?」とききます。そ
の言葉の中に、「自分がいない時にこういうことをする

のか？」と軽く責めるような気持ちを感じました。K男はその絵から、自分以外の学級のメンバーがすごした充実した時を感じとったのではないかと思います。それを素直に受ければよかったのですが、私は、つい「そんなに大したものじゃないのよ」と伝えてK男を安心させようと思い、努めて軽い調子で「畑で抜いてきた大根かいてみたの」と言いました。K男がききたかった内容は、そんなことではなかったでしょうに。K男は、私のごまかしを責めようとはせず、自分も描きたい、と思い詰めたような表情で言います。K男は大根を描きたかったのではなく、共にすごせなかった時に少しでも近づきたかったのでしょう。描き始めて少し経つと、「はい」と私に手渡してくれた大根は、細く弱々しい線で描かれ、今にも、紙の色にとけてしまいそうでした。

母親にショックを与えたのはこの大根です。掲示しようか迷っていたのですが、K男が「みんなと一緒に頑張ってね」と言ったのに心を決めて、全員の大根の絵をはることにしました。もっと深い思慮が必要でした。

母親とは、四月からのK男の成長やそれに伴った苦しみや頑張り、そして、この絵が描かれた状況など伝えながら、しばらく話をしました。描き始めてはみたものの、自分のいなかった時に、いようとすることは不可能と感じ、手をひいてしまったK男の悲しさが絵に表れていることも。しかし、いくら言葉をつくしても、一枚の我が子の絵から受けた母親の失望を消すことはできませんでした。

学級の子ども達は八人です。たったの八人ですが多い人数を受け持っていた時より、ひとりひとりの子ども達とのかかわりは深く、私と与えてもらうもの、おしえてもらうものも多く、重たいのを感じます。この幸せをきちんと受けとめ、もっと、子ども達と誠実にかかわっていききたいと思っています。

(東京都千代田区立永田町幼稚園)

あっち向いて…ホイ!

田島 敏道



ジャンケンポン!

あっち向いて…ホイ

だからさあ、違うんだってば。なかなかこっちを向いてくれない。私が「こっちだよ」って言うとおっち

向いちゃうし、その逆もあつたり

新しい指導要領になって、やっと私の指差している方

向に相手が少しづつ向いてくれるようになった。

私の相手は、小学校教育である。

新指導要領になるまで、いくら職員会議などで今後の

考え方はこうなんですよなんて言っても誰も見向きもしてくれなかったのに……。

たとえば、かの悪名高き初任者研修での話。

小学校の指導案の展開の項目は、それまでの慣例で大方が「学習活動」と「指導上の留意点」であったのを、

私が四年前に研究授業をする時に「そこは、『教師のかわり』にします」なんて指導案検討の席上で言っていると、当時の指導教官は「そんな指導案は見たことがな

い。ちゃんと『指導上の留意点』にしなさい」とか何とか言って強引に直そうとした。私が強固に受け入れなかったのでそのままの形で授業に臨み、その研究会ではその指導案のことや挙句の果てに私の指導を受ける態度の悪さ（これは尤もだと言う人もいる）までケチョンケチョンに言っていました。

ところがどっこい、最近になって「ほらみたことか！」なんていう状況になって来た。

新指導要領の登場である。

私は、わりと根に持つタイプなので、今は定年退職してしまったその人に、大きな顔をして数年前の指導案と今年いろんな人が書いている指導案を送り付けてやろうかと思っっているくらいだ。

とはいっても、私としては、項目だけが変わっただけに思っている。なぜなら、大方の教員の頭の中はほとんど変わっていないように思えるからだ。そのよい（悪い？）例が、世間一般の職員室にわりと沢山いる「生活科の教科書に出ているからうさぎを飼わなくちゃ」とい

う『指導要領見ないで教科書の指導書しか見ない状態』の教員の面々である。

そもそも前出の指導案の書き方のくだらないこだわりに限らず、その近辺から派生している小学校教育の根本的な間違いは、学習をその主人公である子どもを見ず、如何に効果的に教えていき中学校につなげていくかという点にあるのではないか。各種の研究会では、あいつも変わらず指導法の工夫や教材の開発などで重箱の隅をつつくような研究会が各地で行われている。

そんなことをする前にもっと他にやるべきことがあるのではないだろうか。つまり学校のあり方であり、そこに勤める教員の頭の中の変革である。

例えば、幼稚園で一日中遊んで来た子どもたちが、小学校に入学した途端、毎日時間割が決められていて、しかもその時間が四十五分に区切られている。子ども自身の気持ちになって考えたらこれは相当のストレスがたまるのではないだろうか。そこについては何も検討せず、また疑いも持たないでくだらない研究をやっている。こ

んなことを平気でやっている教員の頭の中は絶対に変革されるべきである。

そんな状況の蔓延していた小学校教育の大本が改定され、低学年の従来の社会と理科よりも（絶対的にはなく相対的に）子ども寄りのスタンスに立った生活科を始めとする見直しが行われたのは、溺れる者の擱んだわらなのか、はたまた一筋の光明なのか……。

常々思っていることなのだが、今までの教育は、より上の学校から下りて来て考えられたものではないだろうか。「小学校は中学校から」「中学校は高校から」という具合。

それがやっと本来の主役である子どもにその視点が向けられ、本来あるべき姿の教育になりつつあるのではないだろうか。

もともと、幼稚園で毎日毎日遊んで来た子どもたちはその中から知らず知らずのうちに何かしらを学んで（教師の意図したところやそれ以外も含めて）育って来た。朝起きてから夜寝るまで、ひょっとすると夢の中まで？

遊びどっぷりの子どもたち。

その子どもたちが来た小学校は、その子どもたちに合わせて教室があり、学習があり、遊びがあり、行事があり、学校の存在があるべきはずなのに……。

ところがこの小学校、こともあるうに四十五分単位に変なチャイムがなりやがる。「これが勉強始めの合図ですよ」なんて嘘を教えてそれに従わせようとする。オイオイ、あれはただ、お前さんたち『先生』が時計が読めないからだろう。

子どもが字を覚える必要性も持たないままにいきなり『あ』から始まる国語。

教科書をひらくと、何だかわからないうちに悩み（問題）が出ている算数。人の悩みを子どもが解かなくてはいけない。

せっかく幼稚園の先生方が、泥まみれになって沢山の遊び（経験）を沢山教えて（援助して）来てくれたのに、その遊びは休み時間に追いやられて、それ以外の場合は学習である。休み時間の存在は、果たして遊びと学

習の区別のためだろうか。授業時間と休み時間の区別は幼稚園にはない。発達段階上の必要な区別といえはそれまでかもしれない。じゃあ、低学年のうちに明確に区別をつける必要があるのだろうか。

知人の幼稚園の先生に聞いた話だが、今回幼稚園も指導領が変わったそうで、その時に今まであった六領域の見直しがされ、新しい五領域がつけられたようである。その指導書を読んでみた。そして読み比べてみた。内容や表現に『もっと子どもを見つめて。子どもの活動ではなくて子ども自身を見つめてほしい』と感じられる表現が随所に見られた。その点からも、どうも以前の幼稚園の教育は、小学校よりであった感じである。そう、今までの小学校が中学校よりであったように、幼稚園が小学校よりであったということを感じてとても面白く思ったものだ。

ただ、たとえば小学校が新指導要領の考え方に基づいて完全にそちらに持って行ってしまったら、さぞかし世間の親御さんたちはあたふたしてしまうのではないだろうか。

うか。どういう見かはわからないが、やたらに私立志向である。たとえば、うちの学校に家庭を持って子どもがいる教員がいるが、例外なくみんな公立の中学校に通っている。そしてそれよりも小さな子どもも例外なく公立の小学校に通っている。ところが自分の担任している家庭の親たちは、何人も（これでも私の啓蒙活動が効を奏してか、比較的少なくなっただが）中学を受験させようとしている。で、家庭の事情には首を突っ込まないけれど、遊び盛りの子どもたちが不憫でならない。もっともこの傾向が、親や子ども自身の確固たる意志の基にあればそれほど憂うことではないのだが。

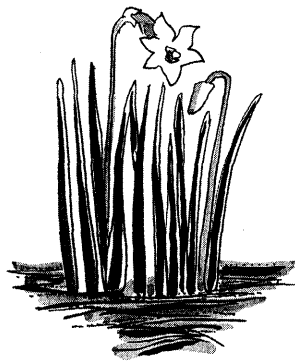
いつになったら、親や教員の皆さんがたは、子ども自身のことを見てくれるのだろうか。

私は、今日も職員会議で心の中で、『どっち向いてんだヨ……オイ！』と思いつつ、穏やかな表情をつくって『あっち向いて……ホイ！』とやっているのである。

（東京都目黒区立大岡山小学校）

二歳児保育の部屋から

守永 英子



夏休みが過ぎて、また、新しい二歳児のグループが始まった。二歳二か月から十か月にわたる幼児十五人のグループである。

初日、最初に現れたA子は、部屋の入口に立ち止まると、部屋の中をちょっと見まわし、先ず入口近くの、すべり台に行つて、すべつてみた。それから、その奥の、机のここ

ろに行き、机の上に置かれていたピクチャーパズルを何個かはめると、視線をすぐに、ままごととコーナーに移し、そちらに移動していった。

それを見ていた母親は、「この子は、あきつぼくて」と苦笑したが、私には、そうばかりとは、感じられなかった、初めて来た場

所で、周囲のものに興味をもち、触ったり、試みたりしようとすることは、極めて自然なことと思われた。A子は、母親のところに戻ることなく、かなり自由に、動けたようであった。

母親から離れられない子どもが少なくないと思われたこのグループの中で、S夫だけは、終始母に抱かれ、抱かれながら「パパ、パパ」と泣いていた。声をかけると、一層声を張りあげるので、働きかける手掛りもつかみにくいまま、せめて少しでも気が紛れないかしらと、トンカチの玩具（五センチほどの棒を穴に入れ、トンカチで叩くと、下の穴から棒がとび出す）を、母親のそばに、持って行ってあげる。その時は泣きやんで、母親がするのを見ていたようであったが、そのあと、直ぐに抱き上げて、なだめている母親

の姿が目についたから、ほとんど、ずっと泣いていたと思われる。ちなみに、S夫は、一歳何か月かで、すでに、幼児教室を経験し、しかも、二歳の初め頃までに、二か所も経験しているという。このいたいけな子どもが、そこで、一体、何を体験したのであろうか。

このグループは、週に一回、顔を合わせるのであるが、四回目ともなると、子ども同士に触れ合いが増え、又同時に衝突も増えてくる。しかし大人が加わって、媒介となると、二、三人が一緒に遊ぶこともできる。積み木の階段を跳びおりて遊んでいるところへ、現れた子どもたちが、「切符」と言うので、言われるままに、渡す仕ぐさをする、受けとる仕ぐさで応える。あとで他の大人に聞くと、遊園地に行く遊びだったようである。かなり、ものを何かに「見立て」その「つも

り」になって遊べるようである。S子が、私に、ままごとのごちそうをしてくれたときもおもしろかった。私が器を手になると、「熱い？」と聞き、「熱い」と言うと、受けとって、水道の蛇口をひねるような手つきをして、何か入れる様子をするのである。S子が「熱い」と言うとき、母親が水道の水でうめてくれるのだろうか。

五回目になると、子どもたちの動きは、一層激しくなり、トラブルも多く、二時間足らずの保育で、大人は、くたくたに疲れた。「私たちがかわり方に何か問題があるのだろうか」という反省もあったが、幼稚園の生活の中にも、子どもが慣れてきた頃大変な時期があったのを思い出す。そして、子どもが、ありのままの自分を出すようにならないければ、核心に触れる教育が実らないと思っ

いた。そうしてみると、この一見マイナスともみえる賑々しい変化は、プラスの変化とみていいであろうか。心のうちに反芻してみる。

六回目、M子が母親のそばにくっついている。あまり目立たない子どもで、私とは、触れ合いの少ない子どもであったが、おやつるときも食べようとせず母親のところにいるので声をかけてみる。M子が、「ママも一緒に」と言うので、母親も一緒におやつのところに来たが、母親に促されても、M子は、まだ、ぐずぐずと母親にもたれている。展開のなさに「じゃあ、ママに食べさせてもらったら？」と声をかけてみる。「食べさせてもらいたいの？」と母親がM子に尋ねるとM子はうなずき、食べさせてもらおうと、さっさと食べて、ままごとコーナーへ行き、ひとりで落

ちついで遊んでいた。

「子どもの気持ちを満たしてあげる方が、少ないエネルギーで解決するでしょ」と言う私に、母親は頭をかしげ、「昨日から一日中べったりくっついていて、夕食の支度にも立ってない程だったんですよ。いらいらして怒ってしまいました」と言う。M子の「今日」は、「昨日」を引きずっているようだ。

母親は、又、思い出したように言葉を続けた。「昨日は、人ごみに出かけたので、ずっと抱いていたものですから、その方が楽だと思ったのでしょうか」

保育中のことでもあり、ゆっくりと話を聞くことはできなかったが、M子は、母親に抱かれることの快さを再現しようとして、前日

のようにならない母親との関係に、戸惑い、固執したのであろうか。そのこだわりが、母親を苛立たせ、その結果、M子は拒まれ、それが、今日のM子の状態を生み出したのであろうか。

今日のM子は、母親と一緒にいて、M子の求めに応じて、おやつを食べさせてくれたことで、母親の愛情を確認でき、エネルギーが満ちてきて、落ちついた静かな遊びに入れたのではなからうか。

安心感は、子どもを前向きにしてくれるし、愛情は、子どもの中で、エネルギーに変わる。いや、これは、子どもだけのことではないのかもしれないと思う。

(元・お茶の水女子大学附属幼稚園)

チェルノブイリに健やかな日々を

倉敷での ジェーニヤ、 ユーリヤ、オクサナ

室賀 昭子

被曝から六年半

いつの世にも、子ども達は希望であり、未来である。

その子ども達の体がじわじわと蝕まれている。このままでは子ども達が減んでしまう……。そんな恐ろしい不安を抱きながら、子ども達を見守っている親達がいる。

旧ソ連のチェルノブイリを中心とする地域、現在のウクライナとベラルーシ（白ロシア）共和国の人々である。

悲しみは一九八六年四月二十六日、チェルノブイリ原発四号炉の事故で、多量の放射能が放出されたことに始まる。

それから六年半が経つ。被曝中心地は今、遮断機が下ろされて廃墟の町となっている。人も小動物も何もない。埋め立てられて、電柱だけが点々と残っているような町もあるという。被災した人々は、周辺の町やキエフなどに避難している。しかし、周辺の町にも、日本の二十倍、三十倍という値で、大気の放射能汚染が広がっている。そして、その土地で育てた野菜や穀類を食べるこ

とによる「内部被曝」が重なり、甲状腺障害や白血病・癌などにかかる人々、とくに子ども達の発病が、事故前の十倍近くだそうである。事態は深刻だ。

その上、その後のソ連邦の解体による経済の混乱が続いている。医薬品や医療機器どころか、病室のカーテンや石けん、注射針にも事欠く実状が伝えられてくる。汚染された食品でさえ、十分には手にはいらぬのだ。

今、日本にもチェルノブイリ救援の輪が広がっている。「広島の被曝者はチェルノブイリの被曝者に対して同じ痛みを感じないのか」という甲斐等さんの呼びかけから生まれた「ジュノーの会」は、その先駆けであったと言える。かつて被爆直後の広島に救いをもたらしたジュノー博士の名にちなんで名付けられたこの会は、市民の一日百円カンパを基金に、「ヒロシマの医師をチェルノブイリへ・チェルノブイリの子どもたちをヒロシマへ」運動を精力的に展開している。

仙台の友人を通して「ジュノーの会」を知った私は、広島県府中市をたずねてメンバーの方々とお会いする機

会ももった。そして昨年の四月、第二段として招かれた四人の医師と五人の子ども達の十九日間の日本滞在のうち、子ども達の四日間のホームステイを、岡山の友人と共に引き受けすることになった。

数百万人とも言われるチェルノブイリ禍の人々のうち、数人の子ども達との三、四日の交流は、とても救援と言えるものではない。しかし、「きれいな空気の中でのびのびと息をさせたい」、それだけでもいいと、はるかに遠い日本に、疲れやすいわが子を送り出そうとするお母さん達——。その気持ちを考えると、同じ年ごろの子を持つ同じ母親として、その子達をわが子のように家に迎え入れてあげたいと、ごく自然にそう思われる。ここには分からないけれど、家は狭いけれど、子どももの母親代わりなら、きつと何とかなるだろう……。

子ども達は、ボロージャ(十五歳)、オクサナ(十四歳)、ユーリヤ(十四歳)、ジェーニヤ(十一歳)、バーリヤ(八歳)の五人。旅行のできる、比較的元気な子ども達だ。ところが、やはり免疫の低下もあつたであろうか。一番

大きいポロージャと一番小さいバーリヤが、広島で麻疹（はしか）にかかってしまい、倉敷への到着が一日おくれ、二人を除いた三人の三日間の滞在となった。

通訳はターニャさん。筑波大学でシャーマンやシャーマニズムの研究をしている、ウクライナの二十六歳の女性である。もうひとり秋山さん。東京外語大ロシア語科四年の学生さんで、旧ソ連を巡る四十日間の旅行から三日前に帰り着いたばかりであった。

以下は、子ども達との三日間の記録である。

倉敷であったこと

四月十四日（火）

（はしかにかかっていない子だけでも倉敷に）との思いはふくらむ。

何回かの電話連絡の後、ユーリヤとオクサナの二人が来られそうである。昼、再び電話あり。「ジェーニャも行くようになった。ターニャさんと、もう病院より広島駅へ向かった」という。三人の健康を気遣いつつも私

達もほっと一安心。念のため、ガンマグロブリンを持参するから、朝晩検温し、三十七度以上の時は広島の医師に電話連絡の上、それを持って、倉敷中央病院に直行すること、というのであった。

十七時十二分、改札口にターニャさん、続いてオクサナ、ユーリヤ、ジェーニャー、もうすっかり名前も馴染んでいる三人が歩いて来る。やっと、の思いである。

写真で顔も知っている。私がおひとりひとり名を言うのと、疲れた顔に微笑が浮かぶ。

一先ず四人は、播本さん宅に。播本さんは、ホストファミリーを快く引き受けて下さった、私の家とはすぐ近くの友人である。

病院の検査が続ぎ、思いがけないはしかのハプニングもあって疲れていた一行にとって、ここの田園風景は救いであったようだ。ターニャさんは、車を降りると深く息を吸っている。ユーリヤは開口一番、「それでわたし達はどこで暮らすの」。とにかく皆、休みたい様子だ。

気がつくくと、首の正面、その他あちこちにばんそうこう

の様な貼薬を貼っている。府中の中学生達が中心になつて松笠や松やに等を集め、大勢で手作りしたと聞いている、広島島の十河先生処方による甲状腺異常の治療薬だ。

不特定の極めて多数の患者に対して、副作用もなく、数多くの検査のデータを待たず治療にかかれる方法として、東洋医学は有効だ。高価な医療機器がなくとも、貼薬を送ればよい。ツボさえ体得すれば、自分でも貼ることがができる。今回の広島滞在では、その効果を試験的に試みている。

ターニャさんとジェーニャが、そのまま播本さん宅に宿泊。やがて東京から倉敷に到着した秋山さんを迎え入れ、オクサナ、ユーリヤ、秋山さんは私の家に宿泊することにして、二組に別れる。

徳方さんが岡山から駆けつけて下さる。ポロージャと「ジュノーの会」の柳田さんのステイ先であった徳方さん宅には、二人とも来られなくなってしまったのだ。

とりあえず食事した。徳方さんが、じっくり焼きあげて来て下さった逸品の酵母パン——。これが、滞在の期

間中、おいしくて力のつく主食となった。

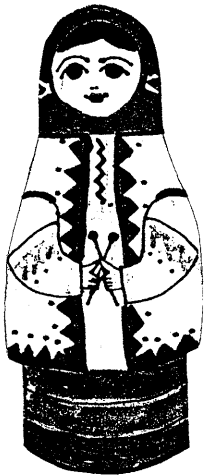
オクサナとユーリヤは一通り食べると、

「ありがとう！」

とそろって日本語で言って席を立ち、二人の部屋にもって戸を閉めきってしまった。よほど疲れているのだろうと察せられ、そのまま、そっとしておく。

四十分程した頃、二人は少し落ち着いた様子で部屋から出てきて、散歩したいと言う。ターニャさんと播本さんご家族も誘い、夜の散歩。帰ってくると、わが家の末娘で十三歳の寿々と、すっかりうちとけていた。片ことの英語が通じたと、オクサナと話し笑い合っている。オ

Oghatembylämsi



カット・播本 亜紀

クサナが小学校から英語を習っていたことが分かり、何とか共通語の手がかりができた。

ひんやりした夜の空気が、疲れた旅人の何よりの癒しになった。豊かな自然に恵まれたウクライナの人々はもともと非常に散歩好きであった。……しかし、今では、子ども達が外で遊ばないように、学校の下校時間を遅らせたりしているのだ。

四月十五日（水）

はや五月晴れ、朝の陽光はあふれるばかり。

ユーリヤもオクサナも秋山さんも、深く眠っている様子。九時、ターニャさんより「起こして下さい」と電話がはいる。

洗顔をすませると、オクサナの長い金髪をユーリヤが編んであげている。二人は、ウクライナ出発の前日に初めて知り会ってまだ十日というのに、何年来の親友であるかの様に息があって、何か話してはくっくつと笑う。

十時半、播本家より一行、岡山から徳方さんと全員揃

う。こんなに晴れ上がった空の下、先ずは鷺羽山展望台より瀬戸内海を見渡そうと鷺羽山へ向かう。検査もない、病院へも行かない、さあ今日は海風にあたって、思いきり翼を広げようね。ジェーニャが笑っている。

途中小休止して、絶景の海を眺める。さらに上へ。ハイランドの前を通る。車の中の秋山さん、オクサナ、ユーリヤの眼は、スピードのある遊具の動きに釘づけた。

車を止め、相談する。ここでもし調子が悪くなくてもこんな山の上に救急車はすぐ来てくれないし、病院も遠い。しかも天気予報では、大雨になるといふ。

私達ホストマザー三人は、三人の子ども達の体を心配して、ハイランドに入場することを迷っている。

「ストレスが吹つとびますよ。大丈夫ですよ！」

最積極派は秋山さん。オクサナ、ユーリヤは口にこそ出さないが、気持ちははるかに飛んでいる。車酔いしていたジェーニャも「はいりたい」と口を揃える。ターニャさんと話し合い、とにかく中にはいりましょうと決める。徳方さんの仕事先・自然食レストラン「たぎざわ」

のご好意で、入場料もカンパしていただいている。

メリーゴーラウンド、長い長い綱のブランコ、廻る廻る、皆が手をふる。笑顔が廻る。ジェーニヤが、もう一度乗ろう、一緒に乗ろうよ、と言うように播本さんの腕にぶら下がっている。馬車を模した回転木馬に乗って、

ターニヤさんは貴婦人の様に優雅だ。ジェットコースターも軽くこなす。それから、最難関に見えた直降下するウルトラツイスター。年長の二人が、「こわかった……」と、あどけない子どもの顔で降りてくる。こんな時、日本語もロシア語もない。問題の立ち乗りジェットコースターはオクサナと秋山君が挑戦。ふらふらと降りてくる。その眼が笑っている。

バーリヤとポロージャもいたら、一緒に遊べたら、どんなに楽しかったろう！病室の二人が浮かび、私達は何度もそれを口にしてしまう。

ドーム型のおみやげ店にはいる。ジェーニヤは見つけるのが速い。そして、す速く買う。十色ボールペンは、オクサナ達も真似して買った。トラカネコかのかわいい

ぬいぐるみを買うと、ふとこころに入れ、頬を押し当てて抱いている。三百五十円の指輪も迷わず買ってから、播本さんに見せている。

遅い昼食の後、再び入場して遊ぶ。ポツポツと雨が……濡れて熱が出たら大変だ。

外に出ると、今度はイリュージョンツアーズというお化け屋敷のような建物にはいりたいと、秋山君と、ユーリヤ、オクサナ、ジェーニヤも今度は口を揃える。この際ということで、そこにも入場。八年生のユーリヤもオクサナも小学生料金だ。奇妙な二十一世紀のお化けが次々現れる。なんともかわいいエンジェルがいる。ボタンを押すと、突然ガラス越しにオシッコを吹きかけてくる。皆、笑って笑って、それがおしまい。

「雨が降るから帰りましょう！」
と呼びかける播本さんにすかさず、

「ウクライナでは、雨もまた楽しみ。雨が降るから帰りましょうという、ここではお馴染みのことばを、ウクライナではあまり聞きません」

と、ターニャさんはずんでいる。(でも今、ウクライナの雨に濡れたら……)と心をよぎる思いは、ことばにならない。

帰り、ジェーニャは車酔いでもどす。

たとえ重い病気であっても、子ども達はよく動きまわると、大声で話し合ったり、遊んだりする。子どもはしばしば、自分の病気のことを忘れてしまう。あんなに元気に遊んでいたけれど、ジェーニャはやっばり疲れやすいのだ。時おり、ベンチにふっと腰かけていたジェーニャの表情……。あんなに遊んでいた最中の昼食なのに、あまり食べなかった子ども達……。

ジェーニャの回復を待ち、七時半に全員一堂に会した。その間、ユーリヤとオクサナは寿々に教えられてファミコンをたちまち体得。十分後には、もう熱中していた。未だに訳の分からない、その小さな機械のコスモポリタン・ミステリーに母親達はうなってしまう。

勤めや学校から帰った播本さんとわが家の家族も集まり、「リビング岡山」の鈴木さんも合流。十五人で、二

日前に十一歳になったジェーニャの誕生日パーティーをしようということになった。

持ち寄ったご馳走が、テーブル一杯に並んだ。今日のために、大きなケーキを焼いて下さっていた播本さん。デコレーションしてくれた播本さんの由佳ちゃん、亜紀ちゃん。「ハッピーバースデー・ジェーニャ」の合唱。

ジェーニャという呼びかけが四回。そのたびに、ジェーニャはうれしそうに、クククッとターニャさんに笑いかける。笑顔が上気して輝いている。十一本の燭光を吹き消すジェーニャ。賑やかな夕食が始まる。ピロシキ、ビーフストロガノフ、きのこの温サラダ、徳方さんのおいしい、いり豆・ゆかり・ごま入り玄米おにぎりも、あつという間になくなった。子どもたちが喜んで食べている。

「ステンカラージン」「ともしび」「ウラルのぐみの木」など合唱。私達が「赤とんぼ」「野ばら」を唱う。ターニャさんが、「モスクワ郊外の夕べ」をリードして下さる。オクサナ、ユーリヤ、ジェーニャが、ほのぼのとし

たウクライナ民謡を合唱してくれる。母と娘の交わす会話を歌にしたものという。「もう一曲」と、今夜はオクサナとユーリヤの二人が、頬を染めながら楽しそうに唱ってくれた歌。ホ、ホ、ホ、とかけ合いがはいる。「腰がいたいから」「疲れたから」と働こうとしない妻を、人々が陽気に囃した歌という。

いつの間にか十時を過ぎている。「ダ・スヴィダーニャ」（おやすみなさい）と、覚えてのあいさつでそれぞれ帰宅。

疲れすぎていないだろうか。熱を計るとユーリヤが三十七度ある。「シャワーをやめなさい」というと、ユーリヤはもうロシア語であることも忘れて、一生懸命何かいう。何となく意味が伝わる。ユーリヤが三十七度あるのは日常らしい。

「今日は汗になったから、どうしてもシャワーは浴びたいのー！」

そう言っているようだ。瞬間、ユーリヤを抱きしめたい

ように可愛くなって、私はOKという。



▲ 美観地区川畔にて

四月十六日（木）

府中に向かう日である。皆、元気に起床。「ドローブロエ・ウートラ！」（おはよう）。今日もよく晴れている。気になっていた体温は、二人とも六度三分。ユーリヤは、今朝もオクサナの髪を結っている。

十時、全員揃って、美観地区へ行く。倉敷川畔の柳がすっかり緑の色濃くなっている。アイビー・スクウエアの中庭の堀に泳ぐたくさんの鯉たちと、皆、ひとしきり遊ぶ。

おみやげ店が並んでいる。と、ジェーニャが小さな叫び声を上げる。お財布を車の中のバッグに入れたまま来てしまったという。あんなにおみやげを買うのが好きなジェーニャなのに、次にはすっきりとあきらめていた。お金を貸して欲しいとも言わない賢いジェーニャのことを、ウクライナのお母さんに報告してあげたいと思った。

民芸館に入場する。ターニャさんはさすがに詳しく、民具のろうそく立てのことなど私達に説明して下さる。

織り物も、染色も、民衆の必要から生まれ、それ故美しい作品の数々を、ターニャさんはよくよく見ている。

郷土玩具館は時間がないので、ターニャさんだけ入場。もう出発の時間が迫っている。すぐ駅へ直行。

水筒がなくて飲めなかったジェーニャの食間のお菓を飲むため、駅構内のレストランで白湯を一杯いただく。

レストランの壁に向かい、何回目かのかけ声の後、一気に粉薬を飲み込んだジェーニャ。飲みよい時間の飲みよい薬にならないものかしらと、今後長期療養になるジェーニャの身が案じられる。貼薬もはがれやすく、かゆそうだ。成長してゆく子ども達。何十万人ものジェーニャやユーリヤやオクサナ。人がした過ちのためにその成長を妨げることが許されてはならない。過ちのせめてもの償いとなる治療も、子ども達の負担にならない様に改良されて欲しい――。

十三時二十七分、電車がはいってきた。私達は思わず肩をしっかりと抱き合っていた。ユーリヤと、オクサナ

と、ジェーニャと。オクサナが、寄せ合った頬の耳もとで、「I like you!」とやさしくのが聞こえた。ありがとう、オクサナ。あなたの英語にどんなに助けられたことか……。

乗りこんでゆくターニャさん、秋山さん、子ども達。閉じたドアの向こうで、オクサナがかわいい上手な投げキッスを送ってくれている。電車が走りだした。昼の別れは、光がまぶしい。

「チェルノブイリ」はこれから

一行がウクライナに帰国して四か月後、子ども達がすっかり馴染んだ府中第一中学と、オクサナやジェーニャの通うミハイル・コツビンスキー中央学校が姉妹校の縁組をすることになった。その式に出席した府中一中の先生と「ジュノーの会」のメンバーが、広島を訪問した子ども達のその後の様子をビデオに撮ってこられた。皆、ひとまわり成長した感じで、家族に囲まれて、笑っている。

しかし、事態はますます深刻だ。小学校の先生でもあるジェーニャのお母さんが言っている。

「子ども達は二つ三つの病気を持っています。授業の時間が痛い、鼻血が出る、……どうしたらいいか分からない。助けて下さい！」

また、現地の医師の話の中に、一九八八年以降に生まれた子ども達が、とくに免疫力が低く、体が弱いという。そんな状況の中で、試みられた貼薬は、甲状腺障害の比較的軽い症状に対して予想以上の効き目があると分かり、転地療養以外に具体的な治療の方法もなかったチェルノブイリの人々は、貼薬に一条の期待を寄せているという。

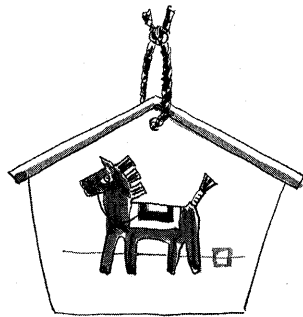
オクサナが達筆なロシア文字の手紙と一緒に、まるでかわいしいシャーマンが宿ってでもいそうな、木製の人形、マトリョーシカをことづけてくれた。

「チェルノブイリ」はこれからだ。しかし、聞き及ぶ苦境の中にあっても、オクサナの手紙はさっぱりと明るい。

(倉敷市在住・聖華看護専門学校講師)

思い出の紙芝居

松井とし



幼稚園はなくなってしまったが、目を閉じればいつでも、こじんまりとした園舎の隅ずみまで思い浮かべることができる。遊戯室と保育室

の間の廊下の突き当たりには、紙芝居をいれる戸棚があった。時代と共に子どもたちの生活も変わり、最後の頃には紙芝居を見せるといった機会はめったになくなっていったが、それでもブランコの後ろの花壇に萩の花が垂れるように咲き、すすきが秋風にゆれる頃になると、どうしても戸棚から出してきたくなくなる紙芝居があっ

た。柔らかな感じの絵と語り口がともよくマッチしたこの紙芝居は『少年と子だぬき』というものだった。

【町へ遊びに行きたいと子だぬきにせがまれて、母だぬきは萩の花とすすきを使って術をかける。かわいい女の子に変身した子だぬきの、太くてかわいいしっぽをスカートの下に隠してやりながら、母親は「しっぽを隠しておくこと。くしゃみをするとう姿が元に戻ってしまうこ

と」を言い聞かせ心配しながら送り出す。子だぬきは喜んで山道をかけ下りて町へ行く途中、自転車に乗っていて転んで足に怪我をした少年と出会う。母親の注意も忘れ、柔らかなしっぽに川の水をつけてきては傷の手当をしてくれる

やさしい女の子が、たぬきだと気づきながらも少年は、その優しさにふれ心豊かなひと時を過ごした。夕方になり自転車の後ろに乗って山の家へ送ってもらう途中、風が冷たくなって女の子は思わずくしゃみをしてしまう。(後略)】

※『少年と子だぬき』ポプラ社より引用

「風をきって走る自転車の後ろに乗っているのは、頭に萩の花をさしたかわいい子だぬきでした」という結末の情景が何ともほほえましく、子どもたちの顔もなごんだものだった。私はといえども、変幻自在の表面的なもの

と、内なる変わらぬものについて考えさせられていた。この紙芝居の原作者が、児童文学作家の佐々木たづさんだということに気が付いたのは何年か経ってからのことだった。

とても懐かしい人に再会した思いであった。彼女は高校生の時緑内障を患い失明され、当時日本では珍しかった盲導犬と出会うために、イギリスへ渡って訓練を受けられた方である。その体験と盲導犬ロバータとの生活を著した彼女のエッセー『ロバータさあ歩きましょう』は話題となった本で、高校一年生だった私も感動して読んだのだった。

愛するロバータのために住み慣れた東京を離れ、環境のよい山中湖畔に移られたことを新聞紙上で知ってから、もうずいぶん時が過ぎ去った。佐々木たづさんは今、どうしておられるだろうか。

(元・幼稚園教諭)

都市に浮かぶ幼稚園(3)

他園との交流を通して

足立 なぎさ

二年前の春。念願の幼稚園教師になれるというこ
とで、期待と不安の入り混じった気持ちでいまし
た。勤務する幼稚園が決まり、園長先生と話をし
ていると、

「うちは、園児数が少ないんだよね」

と、言われました。

年少児が十一人、年長児が十二人。

園児数の減少が問題となっていることは、知っ
ているつもりでしたが、実際に、自分が少人数の幼稚
園に勤務するなんて、考えてもいませんでした。一

学年に四クラスある大きな私立幼稚園に通っていた
私は、今まで描いていた幼稚園のイメージと全く違
うので、戸惑いましたが、主任の先生や、先輩の先
生方に指導を頂きながらのスタートでした。

港区の園児数の減少は、年々深刻になっていま
す。全園児数が二桁いれば、中規模園で、一桁の園
児数の園のあるというのが現状です。

少人数園では、人数が少ない分、それだけ人との
関わりが少ないということが、問題になります。そ
のため、港区の幼稚園では、クラス枠をはずして異

年齢と交流したり、地域の人と関わりを持ったり、近所の未就園児を園に招いて一緒に遊んだりするなど、様々なやり方で工夫をしています。他園との交流もその中のひとつで、多くの幼稚園で取り入れられています。

私の南海幼稚園でも、園児が減り始めた頃から、いろいろな幼稚園と交流してきました。特に同じ位の園児数で、歩いて行き来できる距離にある芝幼稚園とは、継続的に交流をしてきました。

そこで、私が初めて担任した年少十一人の子ども達と、芝幼稚園との交流も始まりました。

◎交流の始まり

交流は、年長同士が中心となり、手紙のやりとりをしたりするので、年少だった最初の頃は、自分達から進んで芝幼稚園の友だちと関わる姿は、あまり見られませんでした。

芝幼稚園に遊びに行っても、自分達の幼稚園にな

い遊具やおもちゃを目敏く見つけると、すぐ勝手に、遊び始めていました。

逆に、芝幼稚園の子達が遊びに来た時は、お客様そっこのので、普段のペースで遊び続けていました。

これも、年少の最初だからということ、無理に一緒に遊ぶようにはしませんでした。

しかし、せっかくの出会いの機会ですから、交流の際には、みんなで集まる時間を設けて顔を合わせました。そして、名前を教え合ったり、一緒に踊ったりしました。

直接的な関わりが少ないながらも、交流を繰り返すことで、芝幼稚園の友達存在が、少しずつ子ども達の意識の中に入っていったのではないかと思えます。

◎合同遠足からカレーパーティーへ

交流は、お互いの園を歩き来するだけでなく、一

緒に遠足に行ったりもしました。

小石川植物園へ一緒に遠足に行く前日に、芝幼稚園の年少組から、初めて手紙が届きました。「遠足一緒に行きましょう。会えるのを楽しみにしています。」という内容でした。

「芝幼稚園って、覚えてる？」と、聞くと、「覚えてるー」「顔は覚えていない」などと、反応は様々でしたが、翌日は、芝幼稚園の子も一緒に行くんだ、会えるのだという期待を持たようでした。

このように、交流の際、教師同士で連絡を取るだけでなく、子ども達にも意識づけるためにも、手紙のやりとりをしています。この時、手紙の果たす役割の大きさを実感しました。

遠足の当日、広い植物園の中で、走り回って探検したり、木に登ったり、薪を拾って集めたりしました。（薪を拾って帰り、園で火をおこし、カレーを作ることにしていました）

また、崖でも遊びました。かなりの斜面なのですが、木の根や枝につかまりながら登ると、今度はその斜面を滑り降ります。もうここでは、年齢・幼稚園など関係なく、みんなで遊んでいました。崖登りを身軽にこなすT君は、芝幼稚園の先生に、「うまいね」とほめられると、いつもと違う人にほめられて、より一層嬉しいようで、得意顔で何回もやっています。

全身で思い切り遊んだ遠足。芝幼稚園と一緒に遊んだから、楽しさも増します。

遠足の別れ際に、「また遊びたいね」と言う声があがりました。すると、「拾った薪でカレーを作る時、一緒にやろう」「自転車に乗せてあげよう」と、話がまとまり、カレーパーティーを一緒にやることになりました。もちろん、その場に居合わせた園長先生も、子ども達の盛り上がり、喜んで承諾して下さいました。

今度は、招待の手紙を芝幼稚園に初めて書きまし

た。

「遠足楽しかったね」「自転車に乗らせてあげるよ」「カレー一緒に作ろうね」「また遊ぼうね」など、子ども達が言った言葉を、私が代筆しました。

カレーライスは、子ども達の大好物です。

材料は、子ども達が、家で相談して、好きな材料を一品ずつ持ち寄って、カレーを作ろうと、両園で相談しました。

又、ライスの方は、飯盒で挑戦することになりました。南海の年長と年少と芝の合同の五人組ができるようにくじをひき、ハグループ作り、一人ずつ先生がつかまりました。そして、グループごとに、飯盒を一つずつ炊きました。

遠足で拾って来た薪で火をたき、自分達で持ち寄った材料で作ったカレーと飯盒で炊いたごはんのできたカレーライス。みんな、「おいしいね」を連発。食の細い子も、二杯、三杯と平らげていまし

た。

今まで、交流をしても、関わりの少なかった年少ですが、遠足とカレーパーティーと、楽しい時を一緒に過ごしたことで、芝幼稚園に親しみがわいたよううで、個人的に話しかけたり、関わりを持つ姿が見られました。

カレーを煮込んでいる間、芝幼稚園の友達か、自転車乗りを始めると、「どうぞ」と、自転車を貸してあげていました。そして、補助なし自転車の練習をしている子がいると、補助なしに乗れるようになったばかりのK君が、側に寄って行って、「僕もね。練習して乗れるようになったんだよ」と言いながら、その子を見守っていました。そして、少し乗れるようになると、「今、乗れたじゃん」と、声をかけたりしていました。

また、芝幼稚園が帰る時になると、握手をしたり、「またな」と、肩をたたき合ったりして、別れを惜しんでいました。そして、門の外、芝幼稚園の

友達が見えなくなるまで、手を振って見送っていました。

この日から、芝幼稚園のことを「芝ちゃん」と呼ぶようになりました。それだけ、親しみがわいてきたのだと思います。

◎年長になっての交流

年長になると、中心となって手紙のやりとりをして、芝ちゃんとの交流が続きます。

母狩りに招待してもらったり、自転車乗りに来てもらったりして、お互いの幼稚園を行き来したり、一緒に遠足に行ったり、交流の方法は、前年と同じなのですが、子ども達の遊びの様子が変わってきました。

自由に遊んでいる中で、ある子がある遊具を見つけて遊び出すと、その遊具がきっかけとなって、両方の幼稚園の子達が自然に一緒に遊び始めるのです。その中で、言葉を交わしたり、じゃれ合ったりす

るようになります。お互いに、ひとりひとりの名前を覚えて、存在を意識し始めたようです。

また、みんなでゲームをして遊べるようになりました。芝ちゃんから、キックベースボールを教わっ



た時、何回かやっていくうちに、ルールを覚えて、「今度は、芝対南海で試合をしよう」と、約束をする程、闘志を燃やしていました。ゲーム遊びは、人数が多い方が盛り上がります。新しいゲームを教えてもらい、遊びに幅が広がり、みんなで遊ぶ楽しさも知ることができ、交流をすることがよい刺激となります。

芝ちゃんから受けた刺激で一番大きかったのは、一緒にプール遊びをした時ではないかと思っています。

「大きいプールがあるからおいで」と誘ってもらい、初めて小学校のプールに挑戦しました。初めてのことで、子ども達がどのような反応をするか心配でしたが、誰ひとりとして嫌がらず、全員が小学校のプールに入っていました。少しも恐がらず、飛び込んだり、幼稚園のプールと同じように泳いだりしていました。これも、同じ年齢の芝ちゃん達が、平気で泳いだりもぐったりする姿を見て、刺激されたのだと思います。

年長になると刺激し合えるようになってきた交流ですが、交流の際、お互いにお土産を持っていったり、もらったりします。それは、園の花壇に咲いている花だったり、手作りのジャムだったり、かにやアゲハの幼虫だったり、様々です。

ちょうど年長の春、南海幼稚園で飼っているモルモットが次々と子どもを産み、九匹の大家族となっていました。これから、九匹全部飼い続けることは難しく、一匹しかいないから欲しいという芝ちゃんに、是非わけてあげたいと考えていました。

しかし、大人の思惑通りにはいかないもので、子ども達は、「あげるのはいやだ」と言います。私が見て、色々説得しようとする、子ども達も考えて、突然裏庭の池のおたまじゃくしをすくい始め、容器をいっぱいにして、「これお土産。だから、モルちゃんあげなくていいでしょ」と言うのです。

私も負けずに、あの手この手で説得し、やっと一匹あげることになりました。芝ちゃんは、とても喜

んでくれました。そして、後にそのモルモットの様子を、手紙や写真で知らせてくれました。「あげる」という気持ちになるまで大変でしたが、モルモットを通して、手紙のやりとりをして、またひとつ芝ちゃんとの関係が深まったように思います。

◎最後の交流　　くお別れおでんパーティーく

手紙のやりとりをしたり、一緒に遊んだり、ゲームをしたり、一緒に遠足に行ったりして仲よくなった芝ちゃん達。卒園も近くなり、最後にもう一度会いたいと思い、おでんパーティーに招待することになり、みんなで、手紙をかきました。

「おでんパーティーをするからおいで。ドッジボールをしよう。サッカー勝負しよう。王様ドン一緒にしようね……」

このように、子ども達から出てきた言葉は、ほとんど「一緒にしよう」ということなのです。年少の頃が嘘のように、最後の交流は、芝ちゃんと一緒

にやりたいことがいっぱいになりました。

当日、持ち寄ったおでんの具を切って、お鍋に入れて味をつければ、後は味がしみ込むのを待つばかり。火の番は頼んで、年長は、まずサッカーの勝負をしました。

念願だった芝対南海の勝負は、一対一で仲良く引き分けとなりました。

次は、「王様ドン」というゲームを、みんなでやりました。芝ちゃんは初めてだったので、すぐにルールを覚えて、楽しんでいました。

そして更に、最後の交流にふさわしく、お互いに出し物を見せ合う発表会をしました。南海は、みんなで作った大型紙芝居を発表し、芝ちゃんは、合奏をしてくれました。発表する方が真剣だと、見る方はより一層体を乗り出して真剣になります。特に、芝ちゃんの合奏を南海の子達は、じっと聞き入っていました。

いっぱい遊んで、一生懸命頑張った後は、お待ち

かねのおでんです。寒空の下、たき火を囲んでおでんを食べて、体を温めました。

二年間の芝幼稚園との交流は、こうして幕を閉じました。

この交流の中で、芝ちゃんと関わり合い、楽しい時を一緒に過ごし、新しい友達の出が広がったように思います。そして、その友達との関わりの中で、少人数で味わえないことも、経験することができました。

例えば、一緒にゲームをして遊ぶことで、大勢で遊ぶ楽しさを知りました。また、少人数だと忘れてしまいがちな、譲り合うということも、自転車やおもちゃを貸してあげる場面で見られました。更に、プールの例でも見られるように、初めてのことで挑戦して出来てしまったり、新しいゲームを教えるもらったり、同年齢の友達から、たくさんさんの刺激を受けたことも良い経験となりました。

交流も一回だけだったら、こんなに深く、「芝

ちゃん」と呼べる間柄にはならなかったと思います。繰り返し交流を続けることに、大きな意味があるのだと思います。子ども同士が、ひとりひとりの名前を覚えるだけでなく、繰り返し一緒に遊んだり関わり合う中で、「K君ってやさしいよ」「S君ってサッカーうまいんだって」と、ひとりひとりのことを知るようになるのです。

また、交流の際の手紙のやりとりも、交流を深いものにした一因だと思います。子ども達にとって、自分達あての手紙が届くということは、やはり嬉しいようで、興味を示し、親切感がわきます。手紙だけでなく、子ども同士自身が、電話でやりとりすることもありました。手紙や電話を利用することで、教師同士だけで打ち合わせて決めるのではなく、子どもにも、「今度は、芝ちゃんとうしよ」という期待を持って当日を迎えることができるのです。また、そうした気持ちだが、当日の交流を意味あるものにしていくのだと思います。

子ども達だけでなく、私自身にとっても、得る所の多い交流でした。

先輩の先生方が、実際に保育している姿を見る機会というのは少ないのですが、交流をすると、その中で、「こういふ関わり方もあるのだ」とか、「こういふ方法もあるのだ」と、保育について発見があり、とても勉強になります。

また、交流の後で話し合いをする中で、同じ場面にいても気づいていないことがあることに気づくこともありました。更に、私の子どもの接し方について、アドバイスしてもらえるのも、とても嬉しいこととですし、勉強になりました。

このような充実した交流ができるのは、子ども達以前に、教師同士のチームワークがよかったからだと思います。保育に対して、同じ願いを持ち、教師自身が交流をして楽しいと、感じられたということが、交流を継続し盛り上がり上がっていった重要な要因なのだと思います。

全国的に、子どもの数が減り、園児数の減少は、ますます深刻になってくると思います。

「子ども全部で十七人なの」などと言うと、「えー、そんなのでやっていけるの」と、よく言われます。確かに、問題はあるかもしれませんが、他園との交流を初めとして、少人数だからできることは、たくさんあるということが、実際に保育をやってみて、少しずつわかってきました。

少人数のよさを生かした、少人数だから出来る保育が、できればと思っています。

これからもまだまだ試行錯誤ですが、子どもと一緒に、頑張りたいと思います。

(東京都港区立南海幼稚園)

ある日の育児日記から

**** (26) ****

佐藤 和代 ***



近所のTくんが、お母さんといっしょに遊びにきました。圭としばらく遊んでいましたが、何かの取りあいをしたのでしょう、泣きながらお母さんのところへ戻ってきてしまいました。

だって、貸してくれない…だって、そっちじゃだめ…だって、だって…。お母さんがなだめてもぐずぐず泣くだけ。気分を変えようとおやつにしてもだめ。圭が新しいおもちゃを出してもだめ。

ところが、Tくんは突然、本当に突然、言ったのです。「お母さん、おまじないして」お母さんは心得たように「ビビデバビデブー！」

これでTくんはすっかり元気になり、おやつをパクパク。私はただただ感心しました。かんしゃくって、ひっこめるきっ

かけがなかなかみつからないもの。Tくんのビビデバビデブー、何てスマートな立ち直りかた！

そういえば、こんなおまじない、圭にもあります。欲しいものが買ってもらえないとき、ひとしきりぐずると「小学校にいったらね」と自分言っ



有は9kg。服を落とすと10kgの米袋です。

の方から「小学生になったらね」と言っても効き目なし。自分で言うところに意味があるのですね。子どもはみんな、こんなおまじないがあるのかしら。いいな便利だな、大人もほしい。

ランチルームとバスストップ

～アメリカの子どもの本音の世界～

入江 礼子

E・L・カニグズバーグの本に『エリコの丘から
(原題 Up From Jerico Tel)』というものがあ
る。この本の主人公はジーンマリー。十一歳。テキサ
スからロング・アイランドに引越して来たばかり。九
月の新学期から、シンガーグロブ中学校に転入する
が、転入生のため、三週間経っても友達が出来ない。
カニグズバーグは、このことを直接書き表さず、こ
ういふ言い方をしている。一か所は、「シンガーグロ
ブ中学校に来て三週間経っても、私はまだお昼を一人
ぼっちで食べていました」というもので、もう一か所
は、「私はいつも自分の降りるバス停で一番に降りま
したし、降りたらすぐ下をむいたままバスの方を振り
返らずに、すぐに家へとむかいました」というもの
だ。すーっと読んでしまえば何の変哲もない部分なの
だが、私はこの箇所を、「やっぱり」という念を禁じ
得なかった。

「ランチルーム」と「バスストップ」、この二つの
場所は、私が住んでいたアメリカ南部のアトランタ市

に似ているのだろうと思いつついたのだが、ある時、それはアメリカの家庭で飼われている犬達にそっくりなのだということが分かった。

アメリカの犬はこれまた日本の犬とは違って、主人が吠えるなど言った人の前で吠えることなど決してない。もちろん自然にそうなるのではなく、幼犬の時、ドッグ・オビエディエンスという訓練を飼主ともども受け、(飼主の中には、こんなに厳しいのは犬がかかわいそうだからやめると言って途中でやめる人も中にはいるのだが)徹底的に、飼主の言うことをきくようにしつけられる。家の中では、主に大型犬が飼われているのだが、そのほとんどすべてが実に礼儀正しい。(犬にも礼儀という言葉が使えればの話なのだが)その犬達と、学校の中にいる子ども達の表情が、イメージとしてだぶってしまうのだ。

それでも、子どもを現地の学校に連れてからしばらくの間は、「なんと気持ちのよい子ども達なのだろう」としか思っていなかった。

やがて、我が子達が、学校に慣れはじめると、色々な不平不満が出て来た。「○○は、鉛筆貸してって言ったから貸してあげたのに全然かえしてくれないよ」「今日もバスストップで、チャイニーズ、ジャパニーズって言うあの嘸し歌があるでしょ、あれ歌われちゃったんだ」等々。私はその話を聞いて、「ちょっと待って。でも○○ちゃんて礼儀正しいじゃない。本当にそんなことしたの?」と思わず聞いてしまった。「お母様は知らないのよ。みんな先生や大人の前行くと、いい子ブリッ子になっちゃうからね。だまされちゃだめよ」……ウーム、本当かな? と半信半疑のまま幾日もが過ぎていった。

「みんないい子にみえるけどな……」

「そうじゃないの。何回言ったら分かるのかなあ。もちろんやさしい親切な子も何人もいるわよ。でもそういう子もいっぱいいるのよ。特に、ランチルムや、バスストップじゃあ、それがはっきりするのよ。先生も誰も見ていないからね」と子ども達。

長女が七年生になり、中学校へ行くようになるのと、ランチルームで誰と食事するかは、深刻な問題となり、丁度冒頭で述べた、ジーンマリーのように、一人さみしく昼食をとるといふことも、経験していたようだった。この年、新たにもう一校中学校が新設され、長女の一番仲良しは、そちらの中学校の区域というところで離ればなれになってしまったという事情があった。「ランチの時間さえなければな」と毎日のようにブックサと言ひ、幼稚園の時にこちらに来て、そのままのお友達と小学校生活を送っている次女や、地元サッカーチームに入っている関係で、クラスの内外に顔見知りの多い長男とは、対照的に暗いランチの時間を送っているように見受けられた。

ところで、朝の登校時間のあたりに町を車で走らせると、バスストップには、スクールバスを待つ子ども達が三々五々集まっているのが目につく。ふと見ると、ポツンという日本人の子ども。現地に長い日本の子ども達は友達（アメリカ人の）とにぎやかに過ごし

ているが、そうでない子は沈黙の時を過ごさねばならない。誰も手をさしのべてくれない時間だ。ジーンマリーも、バスを降りたら、ひたすら家へ向かって帰る



しかなかったのだ。多分、彼女の後ろには、楽しげにおしゃべりをしながら家路につく子ども達の一隊があったことだろう。

さて、我が家の子どもの達のブックサが本当であるらしいと思いはじめたのは、私自身が我が子がお世話になっている学校に、ボランティアとして出るようになってからである。

アメリカの学校は、本当に好意的に、又、いとも簡単に親をボランティアとして受け入れてくれる。日本の学校のPTAも立派なボランティアであるが、アメリカのものはもっと懐深く、柔軟である。仮に、これが日本だとしよう。日本語もタドタドしい外国人を、学校がボランティアとして受け入れてくれるかどうか……。答えは大方否であろう。でも彼らは、そんな私を受け入れてくれた。

滞在した四年間、様々な形で、彼らは私が学校や子ども達とかかわることを認めてくれた。

一年目はESL(English as a Second Languageの略)の先生のヘルパーと、ラーニングセンター(Learning Center)という父母で組織した勉強に遅れのある子どもを取り出して面倒を見る組織に名をあげて入れてもらった。ESLの方は、先生がこの道十年のベテランの方で、本当はヘルプなど何もいらないのだが、「日本人の親を育てる」つもりで、御自分のクラスを解放して下さっているという感じだった。私は子どもと一緒に英語を習わせて頂いたようなものだ。

一方、ラーニングセンターは、三、五年生の通っている小学校にあったが、私はアメリカに來たての新入生の日本人の勉強を助けるという役割だった。このラーニングセンターで、私は、ここに通って來る現地の子ども達のおかれている状況の厳しさにびっくりしてしまった。或る時、ラーニングセンターに通っている子ども達だって、何かちゃんと出来るんだということとを全校に示そうということになった。アメリカ人の

ディレクターと日本人のボランティアをしている母親が中心となって、「浦島太郎」の劇をしようということになり、日本人の子どもは英語で、アメリカ人の方は日本語でというダブルキャストでやることになり、練習が始まった。

いつもは、学校の勉強についていけないとか、又、家に帰っても宿題が出来る環境ではないということ、このセンターに来ている子ども達も、がんばって日本語のセリフをしっかりと覚えて劇に臨んだ。皆日本人の母親達と二人三脚でやってきたのだ。劇が終わった時、「あの浦島太郎をやった子ね、学習障害児という事でここに来ているの。でも、セリフもすごくかかったわね。ちゃんと覚えられたのねえ」とディレクター。私は、それまで、その子がどのように言われているということを知らなかったのだが、その場で考え込んでしまった。本当に学習障害児なのだろうか。私の感じでは、物覚えは決して悪くないのである。「彼は里親に育てられているの。その里親の関係で、今回

の劇の練習（放課後にしていた）が終わった時間に迎えて来てもらえないのよ。劇も見に来てもらえなかったわ。彼はちょっと不運なのかもしれない」こんな話をアメリカ人から聞いてしまった私は表面的には平和に見える学校の中にも、様々な問題が渦巻いていることを知る最初の機会となった。この町には中流の中から上の家庭が多く、その水準を維持するために、まわりの町よりも物価が少々高く設定されている。こういうことはちょっと日本では考えられないが、彼らは、自分達の地域を守るために、こういうことまでするのである。そういうことまでしているため、この町はアメリカでも例外的に安全な町として知られている。町並も、日本の別荘地を思わせ、静かで住環境としては申し分がない。だが、そういう場所ですら、今、アメリカがかかえている様々な問題からのがれることは出来ないということを感じさせられたのである。

私は、次女が一年生になると、彼女のクラスのボラ



ンティアを申し出た。すると先生はクラスの前のエリアと呼ばれている比較的広い廊下においてある丸テーブルの所で、一グループ五〜六人ごとに日本に關係の

あることを何か教えて欲しいといわれた。そこで私は毎週一回、子ども達と折り紙をしたり、簡単な日本語を教えたりすることにした。低学年は学級内でグループに分かれて学習をしているのだが（生徒二十名に先生二人）、そのローテーションの中に私のコーナーも組み込んでくれたわけである。子ども達ははじめのうち、私のわけのわからない訛りの強い英語に閉口しているようであったが、そこは子ども慣れしてくれば察しも早く、最初のうちは静かだった子ども達もにぎやかに折り紙などを楽しんでくれるようになった。そんな或る日、子ども達がのりはじめてワイワイとなると、突然、私達からちょっと離れた空間で、学校の事務のボランティアをしている母親がやってきて、「シート、シッシー」と指を口にあて「静かに。もし今度うるさくしたら、あなた達の楽しみの折り紙の時間は、なくなることになるのよ!」と言われた。子ども達は、サッと黙り、又、黙々と折りはじめたが、又、興に乗ってくると、どうしても、手も足も

口も動いてしまう。そういう時の子ども達の表情は実に生き生きとしている。静かな、礼儀正しい、あの飼犬のような大人しい表情はそこにはない。もう子どもそのもの。しかし、その子どもそのものになると、例の母親がやってきて、「シート、シッシー」となる。

私は間に入ってどうしようと思ったが、(うるさいと言ったって、別にひびきわたるような大声を出しているわけじゃなしという思いが私の方にはあったので)こうなったら買取作戦とばかり、その日に折った折り紙のプレゼントをすることにした。しかし、敵もさるもので、とっても喜んでいつも受け取ってくれるのだが、子ども達がちよっぴりうるさくなる度に注意に来るということは、学年末まで続いた。

私は、ここで、子ども達がポロポロともらした言葉に、彼らが置かれている状況をかい間見た気がした。「私、ニュー(転入生)なの。お母さん達ディボース(離婚)したから、私は、お母さんについてここに来たんだ」とあっけらかんというエミリー。家に

帰って娘に聞くと、「そうよ、エミリーだけってわけじゃないだもん、私の友達には、そんな子いっぱいいるよ。エリカのお母さんなんか、次のボーイフレンドとも別れかけてるっていったわ。ねえ、お母ちゃま、うちはディボースしないよね？」これが、小学校一年生の最も大きな、かつ一般的な心配事のようなのである。

さて次女は二年生に。ここで私が先生にたのまれたことは、算数のテストの採点だった。毎週一回決まった時間にクラスに行って、テストの採点をする。

ところで、テストの結果を親に採点させるなど、日本の常識では考えられない。でも、こういうことなら親にも出来るというのが、先生の考え方であったようだ。お昼にかかるといふのが、先生の考え方であったようだ。お昼にかかるといふのが、先生の考え方であったようだ。お昼をとることにした。さて、アメリカの学校で唯一、子どもの元気なしやべり声、喧騒が聞こえてくるのは、このランチルームであることは前にも述べた。私は、この喧騒がなつかしく、チャクチャお昼もそっ

ちのけでしゃべり合いふざけ合う子ども達の姿に、
とっても子どもらしさを感じてここが好きだった。

ある日、友人のアメリカ人とバッタリ学校内で会ったので、「お昼、ランチルームで食べない？」と誘うと、「私、あのうるささが我慢出来ないのよ。悪いけど遠慮しとくわ」という返事、そういえば、先生達も、低学年の先生は、クラス周辺にいるが、ちょっと学年があがると、先生同士まとまって子ども達とは別のテーブルで食べていたり、ティーチャーズ・ラウンジという先生用の小部屋で食事をとっている先生もいる。ランチルームにとどまっている先生も、教室にいる時程うるさくないので、子ども達のケンカも時には起こる。

やがて娘が三年生になったが、今度は、娘のクラスではなく、日本語を教えるプログラムのヘルパーとして隣の小学校に行くことになった。ジーナさんという私の友達か、その先生に採用されたので、私は主に発音係ということで手伝うことになったのである。

しめたっ、これで週一回は必ずランチルームで子ども達の本音の部分とつきあえるかなっと思っただのも束の間、ジーナさんは、「私、あの子ども声ダメなのよ。お昼はティーチャーズ・ラウンジにしましよっよ」ということで、せつかくのチャンスも水の泡。

だが三か月後、彼女は体調をくずして、かわって私がピンチヒッターでその授業を受け継ぐことになった。二年生四クラス。どういうわけか興に乗るとワイワイとなり、クラスの先生に、「シート、シー」といわれることもしばしばだったが、子ども達との距離は縮まったように感じていた。しめたっ、ランチルームで食事のチャンスの到来と、その頃の私は、日本語を教えるにいくのが楽しみだった。「コンニチハ、センセイ、ハイ、ミズ・イリエ、ここに座って」と二年生の子ども達と呼んでくれる。一番強引なのはクラスでは大人しいミッシェル。ついには、彼女の隣の席が、私の指定席のようになってしまった。

或る日、いつものように食事をしていると、

「ねえ、お姉さんに赤ちゃん生まれたの？」

「えっ、じゃあ貴女は、おばさんになっちゃったのね。おめでとう」

「うん、でも、お姉さん十八なの。それに赤ちゃんのお父さんは、どのボーイフレンドだかわかんないんだ。ドラッグやってたし。(ドラッグとは麻薬のこと)だから、今一緒に住んでいるのよ」

「……」

重苦しい内容の会話のはずなのに、妙にサラッとしている。余りサラッとしているので、私は逆に、問題の根深さ、日常性を感じさせられてしまった。

ランチルームとバスストップ。大人の目のゆるいところで子ども達は、良い意味でも悪い意味でも本音を出して生きている。そういう場に出くわした私は、我が子が、学校から帰ってきて話す内容にも真実を感じ、一体、こういう子ども本来の部分にぎちっとつき合っているのは誰なのだろうと考え込んでしまった。

アメリカは広大な国なので、この南部の二、三の学校のことですべてにあてはまるわけではない。しかし、大人は、大人の論理で子どもが、その枠から出ることをビシッとシャットアウトしている。そういう文化土壤と違ってしまえばそれまでだが、そこになにか子ども達の息苦しさを私は感じてしまうのである。

日本の子ども達とは全く違う息苦しさを持っているアメリカの子ども達、表面が明るくきちんとしている分、その重さは大変だろうと思うのは私だけだろうか。

(母子愛育会家庭指導グループ)

チェルノブイリの原発事故から、七年が経とうとしています。室賀昭子さんの報告には、三日間の楽しい滞在の中にも疲れやすく、いつも健康に気づかっていたなければならぬ子どもたちの日常が推察され、きれいな空気の中のびのびと息をさせたい、と願って送りだした母親たちの気持ちに胸が痛みます。

本文中のカット「マトリョーシカ」の絵は、播本さんのお嬢さんがスケッチしたもの、上のロシア文字は、オクサナの手紙に書かれていた「こんにちは」という文字です。病に負けず、明るく何にでも興味をもつ子どもたちに、私たち大人がはげまされているのかもしれない。

*

昨秋、上野の国立科学博物館で催されていた「楼蘭王国と悠久の美女」展を、娘と一緒に見てきました。平日の午前中というのに、大変な盛況で、人気の高さがうかがわれます。

娘のお目あては、もちろん美女のミイ

ラ。湿度のない、また、人を寄せつけない広大な砂漠が要塞となつて、まぼろしの楼蘭王国を守り続けていたのでしよう。何もかもドライフラワーのように永久に生きつづける美しさを持っています。コンピュータグラフィックの技術により、美女は甦り、大きな瞳をパッチリとあげました。

数多い展示品の中で、私が一番興味深く思えたものは、衣服や布でした。土器や道具類がいかにも「出土品」という感じがするのに比べ、絨緞や織物、ズボンの裾を飾るみごとな刺繍は、現代のものとは比べても技術的にもデザイン的にも決して劣らぬ、いえ、変わらぬと言った方が良いでしょう。歴史を感じさせません。細かい刺繍は汕頭（しんとう）やフランス刺繍と同じ美しさを持ち、羊毛を使った厚みのある敷物は、中国の段通やベルシア絨緞と少しも変わりありません。何千年もの時間が、人間の生活の歴史にとって、とても短く感じられました。

(K)

幼児の教育

第九十二巻 第二号

(一九九三年二月号)

定価四五〇円(本体四三七円)

平成五年二月一日 発行

編集兼発行人 本田和子

発行人 日本幼稚園協会

東京都文京区大塚二一―一

お茶の水女子大学附属幼稚園内

印刷所 図書印刷株式会社

東京都港区三田五―二一―一

発売所 株式会社 フレーベル館

東京都千代田区神田小川町三一―

振替口座 東京九一―一九六四〇

電話〇三三三二九九二―七七七八―

●本誌御購読の御注文は発売所フレーベル館にお願いいたします

●万一、落丁・乱丁などがございましたら、おとりかえいたします。

名作童話の世界があなたの保育技術と演技力アップで
子どもの心によみがえる

ザ・エプロンシアター

いきいき保育資料①

中谷真弓・著



AB判・80頁・定価2,500円(税込)

ザ・パネルシアター

いきいき保育資料②

阿部 恵・著



AB判・80頁・定価2,500円(税込)

保育者と子どものかわりに重点をおいて編成されたもので、演出の
細かな注意点と指導例があげられています。

劇のストーリーを楽しむだけでなく、保育者と子どもが会話をしたり、
合唱するなど、劇遊びに参加することから子どもが身近な社会・自然・
生活などに興味をもち表現力や社会性の養成に役立ちます。

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社総括部(03)3292-7783(代)にお問い合わせください。

キンダーブックの
フレーベル館

フレーベル館創業 85周年記念ビデオ出版

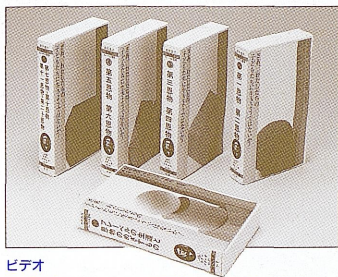
教育遊具 フレーベル恩物 gabe

ビデオへ全五巻

幼児教育の先駆者、F.W.フレーベルの生涯と、
自らが考案した恩物の使い方を体系的に収めた
世界で初のビデオが完成！

フレーベルの遺した幼児のための最高の贈り物「恩物(Spielgabe)」について、その根底に流れる思想と、その望ましい与え方、使い方を幼稚園での実例やコンピュータグラフィックスなどで、わかりやすく解説したビデオです。

発見は遊びの中に。
現代の子どもたちへ
ゆたかな創造力を導く
フレーベルの恩物。



ビデオ

教育遊具 フレーベル恩物gabe(全五巻)
第1巻・フレーベルの生涯と恩物のめざすもの
第2巻・第一恩物 第二恩物
第3巻・第三恩物 第四恩物
第4巻・第五恩物 第六恩物
第5巻・第七恩物～第十恩物
第十一恩物～第二十恩物

全5巻 紙ケース入 70,000円(税込)

(分売不可)

★カラー/ステレオ/HIFI

監修 ■ 和久洋三
(おもちゃの科学研究会代表)

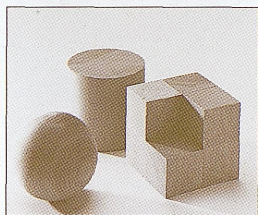
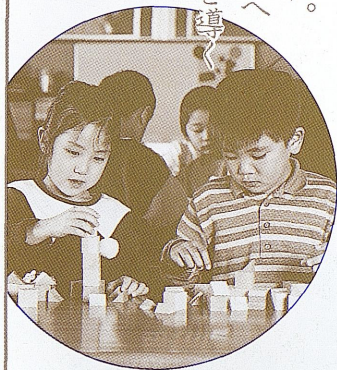
企画協力 ■ 青木八代
(元 玉成保育専門学校教諭)

指導協力 ■ 学校法人アルフィン学園
玉成保育専門学校

撮影協力 ■ 学校法人アルフィン学園
玉成幼稚園

◆恩物遊びのねらい◆

- 自発性を引き出す
- 身体の器官、機能の発達を促す
(活動性を満足させる)
- 創造力を育てる
- 集中力を養う
- 情緒の安定を図る
- 自分で後片づけする習慣を身につける
- 科学的思考の基礎を養う
- 美的感覚を養う
- 社会性の基礎を養う



遊具の原点は、保育の原点。
遊具である「恩物」を子どもの世界へ。

● 推薦します。

広島大学名誉教授/日本ベスタロッヂ・フレーベル学会会長
日本保育学会前会長・同 名譽会員

莊司 雅子

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社総括部(03)3292-7783(代)にお問い合わせください。

キンダーブックの
フレーベル館